義經記

七
八

リ 5
482
4

義経記巻第七目録

はうぐわん北国におちらるゝ事

大津次郎の事

あらち山の事

三のくちの関とをり給ふ事

平いせんじ御けんぶつの事

如意のわたりにて義経を弁慶うちたてまつる事

直江のつにておひさがされし事

かめわり山にて御さんの事

判官ひらいづみへ御つきの事

義経記巻第七

はうぐわん北国落の事

文治二年正月のすゑつかたまで判官は六条
堀川に忍びてかくれさせ給ひける所をわりなく
つゐに思ひておはしまする所も叶ふまじとおほせ
住ゆへに人に知られ候ふ事おのれ義経ゆへ民のわづらひさ
なれば人のおもくし候ふべきなれば何方へもおちさせ給ひて見んは
やと思召されけるが奥州へ下らばやとおほせられけるに
ならひを存ぜられける人々十六人は一人もかゝらずまかりて
そのまゝけり奥州へ下らんとせられけるは誰よりかつて
かくの如きとてかくれなきことなれば東海道
よそのつゞきの東山道北陸道のうちもいづれの道
あらんずる所をさとりて後へさがりてなにとかくぞう
さらにせんの路は下るまゝにても其の道

明治□年□月□日購求
第□門 號482 巻4

亜ゆんぎろ、あまびんせんおくくようるべしとくぱんらゐ
さぶめ極まぶこすぞい及うふしくらトうべさしとぐさ海
くろはやうろ井ヨまやししすの七ろ良や万ろ八ぱんちやさくさ流
下つまえべきふくはえくぱ流志西川をゆく流下つまはえく
中久ヨ上ぞ、経ぱよ乞さしそわくむむじめぱ菊新くえん
志西ぐら乃ぷ蔵出男せうくきうるせうま了せ乞む
こさく、今才の末さ衣す紀すく丹出男めしなろとやなしん
も那くしく王ぞ、出蔵乞いろふあも志くさあでもろ金下
らやとの経ひろれはやくぎろけやろろハさらバ山ぶしの流
もろこまく流下つまはえへとやろれけだいさととよそれもいて
あらんもん新と出し日ろうさ志くびえ山す王新おおま
氣流乃座し流へハいせんどがの志忠を向山新中の國ふ
ぎさくうく出羽あよハえぐろ山やくぱ山社おはさ不るれ
しぶし乃納わひく一条都ぶハ乃ろをやろのぐきさ乃ろ、
さぬぱ八大志んうりまじの流志んさよぷふしのまねまふしの礼
義なぐとそ附るぷ雅ろうろく志くきうとそうべさまそ
作久ヨ上ぞむさしぢうやきろハそれ州ぐのそ、それやさく
流入ぱ承ハくくままよ怪しく海しくバ山ぶしろすハわらく
流在じゆんぴうち斎ろ守城ち流しろ中よ及びん
舞黄ぐるさいさうよはえ志ろ出条都いのとあらく海し
てはへぎぱ都ぢらんぜくはえへさぱ山ぶし乃流とめよハせん都う
あらら経そぐれもはまびろふのとゆめ王ハぱんごくる
志くをはおしぱ西ぐ松海めしくせ瀬へもぞやろうぷごこ山
ふしとろちんまる附ろきく山ぶしどろハいなんぎろぷ志らこの志
な紙えの湊ろぱ都くろくぐうろ井と丹くはへハぞれけるを
こまさふくハちぐ流山ぶしのぷ海の人条ろ下向まろえそ
とやしへきぱぞま上りわるこふくをぐくまる那山ぶしのちぐろ
よ条ろとやしへぎさとや久ヨ上ぞぷちぐろ乃わんなハさらら

んちんやあるぞくろうよもどの前よこまうしといふあんそと
そんをる時きいてぜんまうぞ弁慶申しけるハさいくう母は
し時ぞくろうの思とくゆう人のようぞりしとの中にハ大
ぐぞうぞうの那須のぞうよおふしさぬさとやにしょ弁
慶のハちともかぞくぬのしやにハしハ弁慶るぞぞかわうさぬき
とやしはべしぞひちらぞうをバこぜんぶちそうしくちくぜん坊と
そやくろうがおとなしくまいるらうがりいらにしかれハくろうこまた八
戒名せいぎと若ちろうあぞ候て田男の中さとくきいらひ
きてうんあるがかう武蔵ハいせの三郎よおやすぐひたちん
あろぶぬと申くあんあるハいぶさくぐハさ坊ありしをせよ
そくるひくよるえぞそ付ろうがくる家ハさやうの者ハいせの三
郎とぞぜんぜんの者ぐまゐる良ハ俗をの者やとぞ申ける。
さて上座坊をきけ者をもつき坊すぐ心えをぞよ
八ろう判官殿へとれぞろ人ハおりしまゐらせ給ふの付ろかさ

小袖二流はやえぎを付からぢ絵のそでひろはぐさと大にむ
らさきといふかきかうきの紅よりうろの中の三浦
おくびやうにて飛んでやまと坊とぞやゝうぞひく乃出
立そぞしくる舞姿を大ちん進すくわくわれ神みゆうか
ろおやうをよぢらんのそくごえにちん流をいく務のくるも
あかるふゆいく新家庵うのむさきんぞなくなる。
そんとすしと云たかわひちかまうてかわいぞさげて
つきくぷむさし坊はさんてて云下総ぞうるさしにすしてう
きさせうずひのわしよおのあかうるまきうらは双八寸
むうきくるぞゆいさくろぞんおやうはの四寸のす
ちさらぞまよこさゐすぞぞさうりくるはさそ出から
もおそれ先生やとぞ見しくる熱じくせいれ十六人へ
十ちやうのそひのよそ進いとへ孔雀くりや
わらさきんうぞうしのけるといれうろうちやう

のぞみにはそらおそかりし十二しらひくまに大はまとくち
くろかみハちやうの後まれにさだか蟄服まそく今ありける。
めやうよ出さら給ひしくる正月乃末は吉日二月一
日より刑部家の奥方よ下られなく候とてせめてめやう
よ出さるとひへども様を給ひ出しひとくるのゝ都はげよ
ま一條今出川のへんによろしき人あいしよござあらはやまとん
ぐして下られまでいひしみやあうさきとして下つまるでござく
そのこりもなくはるんきとめぐるしかるまじくハぐ
て下らじやとの給ひければさとうむさし坊中なるる。
御供申べきとのハかられへ来りひぞかたかけ
ほうらはやらんかのけもののはやらんとかくまで。
はぬ乃為万うくるをさすかよそを給ひまろねてぞ
多くとおわんど給ひくれえしくろ鉄多文中けん
るなをとしんそいそんだしま山科のとまんとかけるよ

とひろけるく女房をきれまてこれんぜうちざしをとら
そうきがらちんなまも見てはちじみうきまとひかけまいらする
附らを女房をまいりよあわせまゐらせきそくそくらんハ
よろしかるべしことゝやとすみずなべてとおもや山人を之我夫
母様のひめ君先立てくちて太郎様よハとくま帝さき様
ひめ君さまかくくまよくのことをとくれ給ひぬを後々めの
ものすゑだ乃ありまいりよ対むさてまよ留さむぞよ
うらんハ流くしたる御様をかくまさせすのひまきぞとぞず
あの流としハうまくなかれき母ぬめかりしとぞいろあるの風の事よ
つきはちて乃見ては見人をあられ来らしき給ひまりうれう
こ彩よりか母えてまきとを給くぬそしぬいちうち
やうの殺ハ杉よをよれくたしかりし三条の女とかのふれ
たかまてくちうちしぞ奥方へ下つ給ひうそぐうえな
さけを志らぬわりまよ女をせはならんをいそりしくれるる

おもはぬやうにたのみをかけてもそのことはかなはぬものなり
ことさらにさうらふとも下らぬやうにしてそれにまかせおく
まことの法にしたがひて上下の分別はまもりこれをはいふ
たのみしひとのはからひはおもひとまりたるやうに節
をはらひしく減ずるも力を世にかけてはらふもまた
はらぶくなく来るものはいつまでもはるばるときて相
あるはあはれふかくいさぎよくそのまことの法によ
らきことなるかはいさぎよく来るものあるもまた
ぬくうちとして五条のまでもはらみの愛のあるを
つぎおつきぬるもまたかきの子のもとのまことに
たのむべきにはまたかのつのしの梅をまもりかねんと
乃大和のかれらのはらひのぶ事をはしめかるも
なるのことも今はそれぞれにまたまた相友のうち
うらやましとおもふにはそのまことのさかひにまかする人
やれぞれにはとそのまことをもとめてはかなから
乃そらにとやうにれでもはかまどもいかにも見まへて
美女はまもりはたのしのかれらの人もをそはらひて
おもひの人はまもりかねのことにもまたさらにはらむ
ひとの人をいれずとまたもあるひとまたかの世をは
はぎ所国はらひの上へ法下のはとやせる絵の似つる
見だちの法をうけてもまはいとまのあるもうそそ
くしきをはらんとやてまのらへまかうちのうちにいふ
さくまてはるれども人とさへくきくしそうせくのうち
めとしやうまきはらんなるうちまたあらきかを
らし法ある紀上下つきのさくもあらくてはそくしき
年まうのはいふことをくれるのよ人とまたかせはな
しそれからくるはらあとまくせんとしまうはへちや
せとしてゆくまではまのうちにたれともいふびかれまぐ

あくトつま給をぬ人のだかふ乃ゆへよつてまぎてむかひは
名給たる人きおもれトつまつき給をきさんきんに又よ。契女
不定のみをひろま道ぞとうをかくをうかゝるハぞ行きを
のがれさりかたきのゆへハよろしくうくトらきらくん。紛
梅し給はきさひわしぱ流んぎしまつれて宝西國
乃るとの上ゆゝずをくさくくせしまつてみそうしざれだいはりか
かくろのらめしきよぷ大地乃うらとるやうるを都へか
へさ道し給ふひさしきそうらしのまをみめぐりさる
ふぶらくさまさあ給ひしく人やまくをらりるくきく
ひうきろす乃をれゝつまぬるゝそる道ゆふ川々
ていろよおやとお行中道しも心しきれぱ花くすれ
いろかまをあるなく給世中らくもゝふのこと八流くゝ
きくすと渡れでよぷあり乃乃らん。激き
まくろるしどとすかむゝぬとるや人のゆ行子が。

月日よまをくゆ也べもろしくあうまされだそくれ
あつ人りし芸ちく人を世の名ろく芳乗のもけ氣を揺まさ
べくとけてとらをト来れさうん此田ぬ乃ぶつてろ立を
とくひけひをまへ人べきとて一のよら八のつ道く風とまさくハ
それまゝ世へ人ら全きく今うらきろんとあつさんりすそあり
久き道給とひとくを人乃心流よさまれハカあしとおくとさ
ろゝうぞをせきよあへむ給久道でむさし坊も激まむせひ
系流まやうド乃ひさてのみすとく道ハ流ひ給と世をて
給ひのうぞとすひののわしかもく流⑩よす我れ給ひの
かうしんでぞをあそびされりなどうきさ人の意し
まぐ流もりぜく立道系を一世さ世行をさらそるそ多要て
きぶくきいそくさ利害よかくとか世らバ利害さしハどをく
まつく洛人カべドク乃流くくるろ系義理も流むうひま来

つまてはへとくはと入すひさう多まひてゆめ乃んらし
てそみにはけしさの御渡いしせさこおへ行ぬきぞ判官梅
ともし御目にとのまどふ三家は語んせて見てぞ目とまろ乃は
んそしときうさめくそそれかしめされ給ひぬおもひぬを
かくまくはとのそむ給ひまひまされぞわかくまをにき又しは
まくろ乃さる出来ぬかくるまさる所へし給ひ申されば若は
源氏じ心へとく上つのきぬをきしのきのひさ來つれの
頼よこたる母秋中そぞき給ひなきはふ乃しくさ名をせ給
さぬ御んてみるもぞしくさへだれまうくと程御給ひめへかれ共。
梅家の遊ばされいの所ぞうみ出させらくし給へきぞやと仰
られつ殊にむきしがらう山ぶしの國々よハお人乃やうす
こそはくうちおしまうせけえんぞれおうかんもはきくろ
ひはさくへましくをまくてせひましくは此年の秘蔵
ようさりとすかんそさ世おりしおりしはへでもはくろひけんくは

かたきはかうきもひそて此方ひ中にはらんは出給くろく
ぬうとやしたる山ぶし乃松はきさぬまそて此へでも兄乃ちえぞ
ぞ給あれか人へとまうせいちん時々おのこぞのしとぞと
なくてもせめのくぽやんかさはくろひもそこと承くの
しくこよ御かうちおひは心年月のやうよたなやうみ
乃もけりしさはんはき御かうちひみくとぞらんごうおそ
せ給ひのはちゆくはとゆ給出でぞれハ人の御座よる
そぬかうまひさへ去くて下らんさもと程しまうぞやお
もかくるまてくと給ひ出されとぞつんきいなかいや
くにぞさいうさいとさいかるさぬさくさ方
とるぞしうはぐしのさけよあまうとはてしみくべて
かさけあくを三月とまうすそでかそくかりすので。
とくもくゆいおげくうきまやうよはゆめかくはく
つぽれさやうぞくたよ給ふかへよへ所うさのさかさ

猿くらし山かさ一ぐさねらしわやの娘出種てらりまわさ
ぎのくさびらどよ上まぞこさせなりかぽさ大にぐんをん志
やの乃ひてまどこさせなりおやの乃くぐ男まりまんげだく
く世なりぞろ女乃くうまさくぐゆいべ志らちぞ乃筆ときき
せなりわる事のはうの乃くぞ予よぎてさらわかぎさしてそ
へわそぞさねどもんちくの座うてうどすらなりぽん
ぢろ乃みしさのきやうかくろまぽかけさやう　のみ乃中のさ
どつまでくう家さ世なり・あはぢ一はくさうもくぐうくろ
べぎさまきの内の乃をのさあいぎなりく事こそおどけるきを
つまそ刀て御ざさまやこ乃すうせうくんが胡蝶のみ
びざくにくせらまてく下つまぐん乃中をぞさそとおひ
志く進ら風の会りよ出さちる女中のひくぽよ乃はでい
まぞぐもし火あまくらさひそくむさしぞらどかくさやう
母ぞさくさくこ乃さぐぞひきさしくぽは母どぞうらくは
あるきこゑのへあ由中まぞせそてんわろらぽしは母山あやあ
みそぎんやくへ人ちこよみてくらそと松は世なるゞん老い
ずくろ八ツ家なくてゆんはとてをを路のひしくぱ出あま
もなる事さ世するひはつまだや中ふぞよゑはぽふ乃くさ
をいはなくてきを引なりしまさ母ぞもたまろこさすこし
もちごよさうぞ世おりおしはたさてなほなるうそ老い
かあさおや中はうかりくまくてうせのひはるかやまり
らち母をおなまでもよ切を子ん家母のしさるとおり
これきくれともぞしめてい母くくぞおわりる家さるか
どくに二月二日のご祝のつよつまでゆまぞ御そと出んとしを
まるふよ母し乃はまどに人の乃をしくろぽいらくするを見よ
子らんとは絹んを進ぞぞさくこのさ乃はあめなさ十六
おんの乃くかいまかさぽしろさひくまかりかちん乃え
かきし美くぞくぐやのじつまのをかくづつまひさみくし。

やくさんうちみとしろうまはともぜひなくせ河と
もやいちんさくさいらさうぐさこさらいしとぞ
ちまはお川をそてさいろ魚ぶくとのくきや今を
さうてんのれたりをさらしまおりひくへ来りまでへき
いしやまをあへさとぞすくこまむきびくら六十三まなれを
くらみのくまよのみくひけ谷を屋まふし〳〵みくそおおくく
おまのふさ波をくさへくやきぐうるの源八世いさ天まうの江
きを家ふのくころく〳〵さる女のひのめ色そうしぢよゞろとそあふ
花りもち乃ちあそびちをのまうでおうとさらパらう乃
作くるまちくしこそめさるべさんぞうくわ川さよのまんちま
がらくぐしふゝく出るら路にちくまわり乃かりくこそめを
あしら里をどうおしなさこと郎くし名れぞのこゝ里乃山
かしがあくとてろまおらせくとふれ〳〵神もりてまを
ましきさめてとイをのくぶやう家の神をぞよおり名

にはかりよきとぞ思ひくるまも参らせ候へども、はやかたく
大臣殿へ申しつたへ一天下とぞ思ひ召しけるところに、さま
ぞともなくうち出しくぼんぜんぞくさめなくさらめまじ
くらぶまでの御心よりこそいはでぞ思ひさせ給へれどもば
ある家の事をもおもひところよかしに思ふくちなく、きのふの御思ひや
うちまくをもかげんわけてまいれども、ぞうくわくこにま
で出給ひむきしぞうかくさるよりもろそぞぷぜんは
ざや水乃くゑの御事にもやくまろく下がくさらば
やせよといひたれど御おんよりまいりてやらう所ぞかや
うふれしくうらちゆく所しもなしはぶ
さかんしづらにも下でむへ御くハ御さ給ふよくぶらいて
ひぐくむ御身御給くらせてく御むかひよまいり給ふ
んとやまく御さ紀のくちらさまぞ判官乃御作りなるが
よ人の御ふごらわしく枕りひまいしきいへどもあれし水

もそく見てくるりすふすまにし給ひ乃と仰くおもしぬさるに
よくねかさ出仰もしくく御まして待りまそてまそてを
きくきくと給へだささしを志のび給ひし法人のぼと京
とまそて待らまゐくるらん今ちら乃ちらとえちとをして
をさ御しむまりじさくれはあめ出ずまてくい法ふへゆけと
てもとく給ずそくくぞ京とそそくがおりしと給へだむむ
さしみさるくるくたゞそそくしはろこそろかさてくちを
まゐらせまいらせさらちくあらそれだにけるる乃そしる乃わ
きみがのみかきくふかきずすらきが御のかきとらるれをもらく
さとりくるとときく給ひく刺客うくぞくつきを給ふ
見えこしちのやへ乃志らしをかくさコらけくぞらふ山く
もかつろらくねかさこのかさこもかくそ法ぐく給ふ
まるそそれてくそそくかゐろくろきが御のぢん乃あまけ
よ給はあくくらんごろくくろら御まくれだにおふさるの道
見えらく乃もとく給ふ宮とやのとくとをきくく見えまそそら給
ねよ志のぶかまりじつきのまくそれ草ならくわまりじつとおれさるや
ぞのろすまりまだ月乃くきをのとさむりしふかくへしじとぜひ志
られくあそれならず彩ききのめ西ずとら給のくはらまへ
わ乃ろく給ひゆくく見えしらちもを志れふあそれのうらそ
ひくいやらくあそら給よおれかりしめしくかくそ法ぐく給ふ
すこまれし給をせ出くく志乃ぶ草まきらき志しき法あらくな
見えくころくちくるらせ出がくて大法のうらしをちらくくすまるおもひ
ほのかなかぐさくよ給ひはあめあかさむしくそとしまへたせさちる乃入
あひ乃くよろふもくくまぬきとうちあかしおやしのさくのや
ゆかりら給くよまるらあそれは大法のくしふそくろうさのひろ

大法院の事

あくまよううきさるすそ出さくらまそとぶ天よはるすくしへくとすり
ていちせいかやくまそらぶきむろうまろとしをあまれどもおなを

山ぶしはたゞちにせい十人ばかりめしつれ出給ふに
ゆのしもうぶ大ぜいの鈴木山しかの乃さぶらひどもぞんぶんにかう
ちる乃かゝりしとかくしひくゝそやうくまへとまへくわひ
まいりけれどもや判官殿大ぜいのまへにさんざんに太刀うちへ
世にたゝかひ給へば山ぶしやだせいおほく討れけるまゝさ
ぶわきさんのむねとのものちんだいはいれしとやちから乃ものを取
ぐんえ乃ものどもとうにせめるぶぞくゆる山ぶしのくま坂に
年おもむらしくきゝつゝしのびやどりをとひ給へとかたくせき
つよそれども判官くはぜうあわひたまいあさうおゝくやどさ
ゆかせたまひよとゝかそせんかうわるゝ経を同道
まそよと給ひける気そたとめ乃ちづめまゐらす大ぜい汲
いかそさ母とのめかく城よおりたる大ぜいの娘ころ女抱
あしみ〳〵よろしくおはくいたくしの山ぶしちくにやときふ乃

人ゝ結わらぞ判官し判官殿山ぶし母なりけるをもと
すのふるすゝまに山ぶし大ぜいのぞめく城にゆをして手勢の
さしあんも大かたならず法ぜひなくさもありなんと思ひ出て
判官殿まそてよしみさは城まゐらすぐやしさまさぐらく
しぶんそうちらくもつらゆめてもかぐゆくそのくにさんに
へくくんあいうにおのゝなきてにハおそろべきとおもひそれなる
城廻ほいてひとをけはしく男をよびよせてうさぎるまるを
へ申ねさくいひさきかゝし申しそおはかれたるまひし
をつかれし判官殿よ屋とむかし来て世くはらさいふぐ
せんむかは屋ん乃をんなをいるゞさやうぐんことあいめ
てかゝめずをやとぞやしかゝのかれたかべとにくゝ。
石よくちにいひとおりやお判官殿まゐらせてはらさとまいらせて
くなふるゝるべきさかふめしゅろしもせくまゝさげとそく
んおうとそみかりしまくと乃山ぶしはまちくいしせ給ふは

付くるおんなりぢやうじのおそれもわらべ〱ふみ判
衣義ふくれりしも世ハとてかくしけるくもうあくら
義乃流れとふあくましも世ハ然これわらべ我出ひく
つとめらくもやもるべきるすみらば〱しかの
くらぞいひろ女こまことゆのくちさいハ地とこゐめぐ
ゑいくおくおろそわとまろれとこたりし女乃中串
ゑ上つくさの流くよ入ぬるすやおる城へいづくさしてぞ系
つらくやさんとくぶ独れくもら宗やがくもうさ
出ぐく行ろが大津二合足をそぞや流をたまゝそ
てるわりるんとや裡をひろんぞんのかりよどの
つきくぷうり主人よえしめくろるすゑがせりよむのくが
おやかとこよ志さろふ女とくひさふきくんのゆく
くぞさやなかくろが乃女ろさきためさるゑきそれ
つとくんだ大坂にみそもあまつくにめぐきくるハ大津江し

ゑく庭に次めくろひがしの座つふさく以ぞ判衣のくくて
とまろそとくろやしくろが和乃との由主とまゐてしやき
家の入川江戸女しぞ主い君系ひぐるひしくぱ地とこ
女らくるとくくれめく父坤沿くのかうし乃おかれ
ともをるんやぞらぞたふしわもせくるに世よとそと
つとさわるそのあるまハふまもくらまでふし女ろるを
大津沢しゑひて主ちりくきて流くへよ乗りて出
らりくしくやしろくろがに行し爰へすもそ流さ以え
独女めくとのよくるひ以足きうしめされ以へぞ以井流せ
そまり以へこよひハ足よくわくさ世をひくぽ日の流れん
とすなふとしくのかれさ世路以へさぽ足よ山科乃さまを
んとや人志やうくるくとるまへく判衣房を行中以ぽ急
ぎ流お以へこまてよ小家女と一そう持くはよめされ以く
光乃酒盛女の流中小舟よんそえさき路ひくはそで急ぎ

はまべへとゆうたかみゆきゆうたハかほにあやまりくろうかハ
はんの山おさやうよあんだうひはんぜんぞうふぱうりあまう
ましはくる日のもとのひはんぞぱうくいハ母とすと
て出まひるまへんぱ母おぞうハばのうふめしまてぱらく
あくちの山とおもて来ちぜんの出へ入きぬ下とやうろ。
剃髪出させぬへと大ばは次郎も京川よ来ち。はや母を
あらえくそ来せたつがくて大はゝく山ゆるさき
ん乃れ乃なし口と海つまくゆくうはぶいはのうよ地とく
母とくはとものちうにふあひくゝさきとおうちそは
と承くはあひぐぱて母ゆく剣のとはそハ座くそ
来らはえんとゆくされぞぱ手こ乃ぞ大きなそとく
ぞでゆくうぱ大はは次郎はみよ海らくたち力日紀
よえさみく矢さき杉ひ弓とうえまぽ次母よぞう
へくおやはえんとくだ大はゝのうとハおしくぞ

せくうのむしろも風いさぎよくして舟よりおりてわがくらうるえは
それやまるちごとなくおもひ入まうのさくまつりの
和うさんごくは見てひそうしさえ乃松おまつもひえい
さんとや山まの清水うでんとそへつきも道へゆくぞゆく
きたそちくぶりまとやまくわが世すぢの風よまつせく
ゆく程よ秋また夜ろよそめしおわいぶくくよもつぬう
らそむくざゆくかいよぱそすくのやすしく年でこうそい河
くずとそひ道へとおすとの堂かくし乃浦とぞやしくかぶし
乃ちここまでをささうしめしてくぞつきの日ころ
志きうふさといさそのこれ乃けりのかくがくてのおこ
のうれぞ屋さしさぎあらひきの御神ともそぞあくたうこ
ならぷみの八の口うじめくせうか
うらみくさ乃く入えのうら風よだたるなさこゆる
秋の夕くまでと云うんふるきんつを今しそ物りひおもくれ

まこいやりのうらとこそざるとてくぐい津の浦にはきたまよりうらみ
すらん乃人々をあげまゐらせて大津源氏をはじめ中なか
つたへまふしぎなることありて見るこゝろ也へふきつる風
の今又かたり来へかさなる村友伝しまゐらせやりハにわ
すれさのそのおもてもおもかけのかぶちとせちやと
をかしめしむさしぞうとめしくちとせ下らハ坂ぢのく
あんまさとまゐらせへしちとせぞやとのこまへハ舟学文大津
源とともにきくゝまゝてそあれどもしきるぞぶんまでこゝ
らをまつありしにあくつこまかくをるしせ給ちくおぞんのまゝ
つまどもせよぞそむひの中よりもえぎのちう中紀よ
あかつまんのかうを給まへくぞうひよるるぶ大津源氏
さ給くいはまくをはとも中くく也へ共がしく平和の流
おしあわしく後えんはましていと毎中くいはくすとさゝの
見てしつまさんおつとれつてゝ多ゆうくゝ見ん
せいたんとく論かりてうま下らうるまでとを情ありてぞ
わかしきろぶ大津二見ハ家よ論つきて見ん人ま一乃女をとこい
あわうとさとへゆくいまでうてぞかくらるゝ大津源
やこゝをくくとびひゝれども手をせねどもおそれてゝ女ハせん
あすさるをせずあらり山てしそめく村友家ともにして
あそよよろきめせ見んとせしまゝ家中よのせくうらいは
のうちまおくをくり家ちんあくせめるれどわかうとふ
く抱とひはるあひごふくされつかぐりとらうる抱てみよ
そくおかとえてはす紀とを礼出しくかゝをとさまくれバ孫
見てまちとこのひさしなる事にぞそこきるつまあることもてきさ
さまうぐに今あくちれな給しうくしきみくそまとにそ
こゝりぐらくみくこしそわまとゝく大家をよ家こゝろは
らを見ま二でおまりよらくましくこそありくるかんゆかとこ
いふとお女の打ぶくをはつくせひしこそさとべきにたち

うひさらあめうしきにいそうかれ

おとち山のこと

剃髪せしハ法の上にをかたる御堂の前にしきちせん
のうへにおとち乃山へぞうつりぬ寺いにしへ出家
て大法の下にふかつき者の所へ所には母ハよめされ母にいまぞ
むしろ仏くある事にあへき所うぞあれおとちの山に
ある人語そもしてたまはそをまかんせきこうらしく見たら
をかさのらぬ山る事までいうくとそとぞてよのほこと
さくしきなりへさりくはげにこをかそ世ゑをほだにさうの
流れしょうたなるてちをざれるわ紙そかかうちらく
母くはうち乃山のいうとそめぬ所うゑりそふぶふ
くのらすくそうくさのころをすもおそれ久れかんなる
山かしどもおまうる乃流めてこりしさん附くうちらく
しらひはりたるふかくて山めくまら者入のきふかどうよ
をまとてまくまでふくらうちの方ちる事二町ちうのう者
のくだ木乃とのよしきうそそいきにおひとそそぞさ
てあくわのこととやもとめなりおのこにそこう乃山や是
をもかに山といふ庵らんとくいまへでだうくらんこれ
そむりうをわしいろ山とやふうち。當時ハおとちの
山とやなくたほせるまでにたとしろやむしろはしい
乃山さいふひのるをうなたにとくおとちの山とハまの内きく
んとのさまへだこの山をはかやらげんせきさみえくはか
やらおわりまにち称よのおりる事なとあつさい下
あとのぱしそきそんじくちとするとはひごわ
らち乃山とハやるあわりとの所へでむさしぶらうえ
とやすくるわしわくさなきるすこほをはけるのき
はれど人のおしるまちをそれそらせてとさくわら
ち乃山とやはちんよハ目せ本の人ぜきるしん山の

あらちの山すゝむことをほとしは一乃やきのしさい
をしめんたいしそくしうちくはへとやくれども
判官(はうぐわん)殿は弁慶をめされ越前へはかゝるぬ弁慶よいらせんとより
こえぬとおくこちらをやすみぬぞと候まで弁慶申すやうちん
ありてあをまめのさんぐらくたみせはへもいろそく弁慶申すやう
へいせん山とあらちの山とするをかぞの国まてくと白山
とやしまぐ平泉(ひらいづみ)よりのつうくうの宮(みや)とくわりしまる
がへつぶの路ありくきさ紀の御称ま見へとあらわれまう
せ路く年月(としつき)そくりぬびさる称ぶくまいらんとでよ
ききらくまけのひらぞ。わおぐくつ家ほかく遥まし
あるべしとくかぐ乃国へ下まのひらかとよ山の山のぜ
んちやうあそ一むちにはちゐの家つきのひらるぞ。候
祢はさんちうづきゝふこそとて。御縁とのぐきゝ気う
せのひきうりくし。でとぐるちちはさんまするかくぐりぱをず

さんのあらちとこかさせのひろうまおわちくあらちの
山とゝいやはへぱてこそわしいの山あらちの山ちおはくる
道ましれはへとやく道で判官殿し御涙をかくしける
ままさらとくはらひ路ひろう

三の口乃関(せき)をこちの事

弁慶をそへまわけまであらち乃山をこえくむらせの
まへ入をあらちの山乃宮の山一御身のさへりまふ乃酒
かしのうこ山よ紛らちもわりぞことを三の口とぞやする。
あちせん乃国の住人たうしき(?)のちから乃国の住人井上
ざゑもん西人弥さくあらち乃山の守屋(せき)をあつらへさくよ
家三百人ひうこ二百人の守もりをさへて。守屋のかすへよ
らんくの守くまうらくべく文もし帰くもひのそうす事しゐ
るかちんまじうらきもそくま尾くまぞ判官(はうぐわん)殿さくらうう
めぐらきてこそうきんしらくそひしめきころぞうち紛(せい)人の

お安居とかんながらくもは山山ぶしらうとはじまんとぞよ
そのかみ出羽りしらそやまきうござく小村くもじきさ
ことものうくにかゝりめうろ羽によ悲ちぜん乃かるこち
あさ乗ひてまゐる男のきとてふかりらくいそぢハ
志ぎすくそめあひくぶお友ともことのひとくすは
もろやはきちさいまろく此紙分ほのりすくわかうと
の縁ひろうさきのちひてるかゝくしくとさきんとし
のまふ雨がずすとら人乃中を入らく判友のほまへよひさ
さしばにさくが隔しとおそはも色悲ちさいはいくへつくれ
下つもほどとやしろ重ゞむじぐさとろ中しろハ悲ひそれはさそばし山
中よおんらぎよ悪をとりづうろべきことのしそ枝し孫
とつひ重でむしぴさしきう二重と中かくきやうのきさこの
おもちん一の悪乃うりとつひ人れどもぷ乃おとこおに
しよかくる卯はそ若ぞもしころさ糸らせくはろかお
くいわはそるいるらあの出乃行人らくさ志えんとや
人の肉ふはしが平家けいさうの肉をはよくはらくは
しるかしまゆらはえん乃しし君合戦乃肉志らぜん
とのやうぐミず出のぷ人数まおつきすのひーむさし場
とかんなゆりるそひぐそのりくやせでばいふにはさてろうらん
くゐまちろくあそふめはなりよるとせんおのさきれる
うふ此ミら乃ま君よみてまゑと縁糸しせはそのとそで
あれもられ久ら此へりば山乃魚ぎもうひじへしふ
てのうえあしよかく里くひらがちやう人出く悪ちぜん
の出あうよくつ車て西いせんしを椿ひくくまさう
西出くもうのよそよ刀くがふ津のうち船さ人
出くちのあてわくろ乃さくろりとせさをすひく孫わぢり
乃松くとるかあてやて山のおんぜんなよそみてらり經
ひかぜの出文乃あしよ出く大のくまらり志すのひくお紙

がされのちしとおもてうけ乃くるまから山と海てくろ
さうくちのかりしをこいやうよかつまうく六年うじ乃
日くろしくあすご乃ちやしとあつめくいきせのさくら時
十八ケせ経おし、こやうされのこよりといちふりよかつまく
かんだいすゞりのわけやおん所経画く所のうこ乃山を
ましてまふ掛三絵く恋ちごの宝あうふまへくた経
えのはより舟よめしくぺゞ山とたまさがさよ二十三里
乃るまや海さ川さしられをこまさし縁ぐちお海
里よ舟を清きくらこやりしと掛三て九十九里の名所よ
くりまくの内る里ぺんだく八十里乃名あぜあこわく六
いそ女とい平和よ名くぺきこうしかれら名ゆきさしろこ
清よ山海まさきくうな女すじいそのうされようつまて
たち世川やあうごろ祢んどものせきぞいはこの志やうた
のんじと経らきの日くぞく海乃ざんざんと子一掛

ふかくきぞきよ海と云和よ名くぺきくのそうふ舟のさき
さしくおいうもの清よ清きを絵くぺちさく二派江を
うこのこ志よりまくぺい所のせうさと思えくこやうこの
乃原清じのまうちのあ所が画松しまと中名所く
見んのぴく三日よりこちまくびが子はものびざう
當かめ日り山をあえく八むしでえのぐんじかむそ
めぞめ小町と中ゑのまきはかうむ清くつきむろのさと
とわん和ぞくこまちがせこさらにはきろ時ちひらの中
ねわび川まへ下つまを經ひく名ふいおしのおゑそがきくへふきこ
うささくおとは十て一まぶ井ね下つまのおひくおぬいをそ絵
へもむひるしくなつとく年名く数ぬとかせむおの六
がちうしかすさうし絵られた遣でしおうえいよう入さる松
とうそておのえの松とは中はえと中名れいは井ねあねえず
えろ日よりて松乃下によ世を埋めてよここあひろううて

くら馬やおもての杉のかげ八郎のはてよはむかし
たゞ一しをのどよむこゑひゞきあいおもて法螺んとしてくろつ
よ川山一はづにもあらんまでひゞくひゞくちらばらくばらは
よまぎれくけふこよからせの本堂しとやなれば判官
是をば法て見るにそのおもくいおし八幡のはたぐち
らひと杉ばゆるそばや山ふかくつもるくゆみんと申
らまさんだし弁慶やしるすこうくらせのなべさむらいざんとく
うぎめを法螺んせんとたかりしめされだくらせの本堂
しぶさや川をみをこしらで来らせはよそいくかぶくるひ
とある紀はくつまるかそしく悪を多ぞろう来らせんとく
そせをるとしく杉ばしはざる紀へ登りくもあく今はしてこそ
よくさるかるさまのじとやくまつむぞよ紀やうよえつ一堂
ず紀しまそうぴさんぞう立そひくとの山をとのえ
坊よくつるくゆうんまうぞとやむやうるよりてあつぱれ
ものゝいかゞさしのつくぎをくひをかけつこさるさ坊
はたくふをおそむ母とかすゝへてうるをぬきさくんけふさ
志おてくぞとの主君のまへはかせとせめるまでをおるひ坊
本いやしるるそまてとよる上田さ急かんが道よはしか指
ひろこよはくかくの西新上左衛門が道よはしとがりて
来るせるくゆしかくはへだぞおるむりひ来るせるくそ
かし来るせはへと紀し主はへ世いるくの悪夫ぞおるに
ねじ来るもとへきとやしるれぞぞれしそのまの旅す
よとてまん中二刀さしつるぬきさくひつさえ所雪花
中は上みさくざるぬていつるそこ紙つきの一井上が
下人平三郎と云男かそのころおもうよ下らう
乃は堂のさるそくいけくもせひとみ是ありぞ拇十よ人
乃くてそてを紙くてをとうちふさくぞせさやとさしてそ
おもしるぞ十町だるもちうけさそせいを二たまさけく

てきかたへうちこんだる義の御供にはむさし坊ぞくいせの三
郎ひたち坊をはじめとして七人ど一手にて小の乃ゝ井ぱあ井ぱ
乃御供しくすれ持乃三郎のとくまま井ぱ
こさんあぱれとりにくきあひ又所ぞうきへぞてたろがされ
のせいはきま先日まよりむかひさうされた関もちをとみて
ちゑやとひやしそ久し百人ぐらう七人をかするに礼こ
めくらきしそ判官ましかすれだばかござとられてうと
の先ゆくをちをめいまうあうきめせ刀をすぐれ
そ判官の正んふをおめさされだがのもも心ち
つきかりがお官せくと出く給ろまなうそく
山なし乃うたるすとしくはへでも出切しよさうせう
ま江やらんとの緒へでおんでうそぐる山ぶ九郎判官
教にくしそおりしやうせしやすれまバ山寄屋の大将を
猶衣とじぶしとひのみへだ當田の緒へはらうが岩の
の基乃井上杉者のしやへ入けくはへ器の来ハ九さ下つもぬ
井上乃今津まれをすかとやくされたぶ出をたかせき
ん再よくえくろ山寄しよまきくぱまでにとざかいく
おぼえ義あらでば山たひの中よそくろ乃ちんぐんの流
正律くさんそんのおそしまれ母は山寄やをはむろ奥とさ
ぶあて八条の为めをひきくれさうれをふ主とそ給し主
くらが世きちるどもやくおきがふもお官雪くおりききき
むえんこちやうをしそ給らうべくれはにはまにさるいそうく
おうらんやうろくいふそとおずめくらが舞楽を見まやりかか
きまのでよくせん途はさん走る上名山むりし系がやまを
流をづめはくハせんなしやお屋まし坊うこのきはへとぞ
やしくらが体れくせきやのええんよの緒へちん乞見しそ判官よ
てたりしおしくれ舞楽文やしくらハが乞たてぐる山のさぬき
坊とや山ぶしめくはぐ國聖よ来つきく年よりつき

しかく下向(げかう)中ハ九ゝ兵利女房とうやさしきこの〳〵おとやう
んとえらの玉とやらん〳〵いふ事ども〳〵移へ上りしとやらん
それはしかんくろ山ふしかお吉といふるへきやうしそれをそ
生といふ事進どもかなかとちんど旅へ出らが多よ矢をそげ
おちかちかのさやをえつしくそおうりるがおとの人〳〵を
せん方ま〳〵ぞ来らるがとゞせきち先されだにしそれ
てみせひ乃中をよ気こあく〳〵でおしろをそれためさるれバ
かの乃こゝろえ入らし絡ちおりせきちる中なる去やうく
志げより絡へ利女あるぬ山ふしろ〳〵後のたうけ於の関
てあとおもんで見てよ若くら今にわかおもくだくろ山部の湊
らん関くもあまとこ〳〵すさえて利女なかしぶみ細とおもひて
関をとあらしてそ絡らんと急くべしぐんの山伏あるハをそ
関兵衛でがさしと此進ともりくおうへきさとはおろく
又きかる男とらこもくやなるハ不好山部やりてそ遠々

人三人のそあかしめ十六七人乃人〳〵よふりで〳〵関をまそう
てハなるべき関にあつらくを絡つまりへ海くら〳〵女の汎姿出
まるもかうつ家を刈きなさせうちそ〳〵関にあいろく関守先の
兵粮米よせてよこは〳〵関にを絡はれんとそやうなるが舞
営みつひろきらずわうしまえるかを気は〳〵のなんはおはるひ
まちく〳〵の山部の世きをまるまそがうやまき倒れさるの分るまま
だきさとぶるれだせてきちる先充をやのく利女まてそおおね
とぶるもまあるひハお女ちまでゞも在おあしこう今まで〳〵ね
えかぐせだむさし坊あるとは〳〵いふそのこそうやうよきちんぞら
めるごちしかのおるちの主くやなるおさきさは〳〵せえて関東へ入なりまま
いふせくんだえそ疑らはえん和で是をそめわらはえんおこ
やうえまでて舞あるえこれハおんぐうぞうしの汎ちらしいあへくこ
そ関東乃流ろびは上下の貴ぐせてきや乃兵粮米までてる
せんくもでろきちきまりやかく〳〵やあくらくくやがもとて

かるべしとてくちびるもさえだれば十ちやうのさかなは関屋の
内よりも人々ぞよろこびの人々にむかへとく内よりいへば、くどし
てそれほどの物をば関ちる事申しくたびたび舞をば関ちるよむ
名月くらべもそぞろなるぞ思ひめぐらばおん身こそでもこのたびの
そののちも度々中し人への思ひちがひたる山すそくおんとげはと
やおん身ちがひてまね(?)を聖(?)とくにあらば志ぞく殺をかへて
てわくらくこう陸奥の雲(?)てやまひくよ侍らひておもての秋料か
どうかうくさいしさるほどになりともあれくするべく侍りけるに絹ふ
ばおん名やのうちのこと給しきはうぐいはすむのをも侍ばとも悦けた
ばかりなしひ立はくぶつでせんと殺さばかりよき事とくおんで
こらくは殺をへはちんちのそうまでしばへと拙のみまとうとすこ
らんばかりぬるさくせんそくしぢひくよ絹ねばおさぬかとし
さらのかりよ振舞をまちぞ関ちる殿も見たり八判者まぐくおをせ
ぬきみられたぐばかりせゆとうく関のかんとありくまさうれしきなり。

ぬ猫あると一歳子の八歩もしらく一人にて二人つゝさかりのかたや
まうひくそぞ此給ふひさち場にて入てかりさ給はせさらうろふ
給ひきたへまことなれはおもとむさし殿とかや関のうへんぞ
ぬ給へりとぞ毎度の中々は関をあれめんぼのお方すそはく
いふ給からかりはぬかこくめりくするべひ入くはべ世は二
三日おん身は拙者ら世話にかはへばかくるしくは関屋のかた
狼來まじし給はくおん身よ来てせて紙をまへやうつう
志なくさんまうつうる流清ひくきそはへとくこへまゐり関ちる
世拙者を招き山林の方ぞお前とかせつこえて母もの文
ふと又飲料いたしぞなみ八日ぞ中にかくれたびの盗拙者とちと
ぬれこさらうかくしておまそれ来てせてよとくおいれば
らひ川乃やうれたくまい一ふしつまて逢ひしでせけ家
舞あふ見るやまと房がそれとひかれたかさ
たりかさしあとてうけれ給ひかり舞楽はすけしのよま

はいおほくあしすゝかゝらいれいでしおもひてあく吹おとし
くびはうけからだいくゝろの志ゆびをそへりくさしりこそでぬ
はとぐふぞおのりたりばふか首一大まうきんたんくまの八
三郎ぶんだん太こ丸八太あんくらうどうじろう貞たゞ十方
のまん山乃こわうきんぶらハ七党の大かゝんぞせ八十二
めんくまんぎんぱいなるまでござおんかもぐすが大御神ぴえい
さんまつり古社のこや孫みえくハ判官ぜうちやうけ家を
せくおゝもちのせきもり乃ふおけくとめさせ奉らぬを
後代はほげくらんあうろいにいおからべくろ山乃さ
ぬさきちうがたんとくの孫をこせのへとおりたる関守る
ともえ々をちやうきゑんしぱを西のをしぐふそなひたる。
ふ中まゑ八まん大がさん孫みえく忍をくらおあうむろひ
おうとあるものく奥州のおくさうふくとぐきなら孫へと
御りくもののふもそおちられならおりさかは月ゆきこ御えんよ

たちゆくんちくてはらちる乃関を見るも孫も馬を見
はくるかのはま下つきくせいのすいかさ川の流おまくく一
東は流はやそるそ出羽へ下らぬ西をそうでゆのへとも川まさ
二月のむしめのとをまれど風たぎしくこそ行のふ西をさ
ろうまくらちらくるもよそ流秋ともあるくさきのうと山ふ山
とあえるくはらずきもふまつて音ちせん乃風のこうふぞ
三月のぶきれ小くく三日流きうつゞちうまちう
西いせんし流見物のる
横道なまつたいさや當西よやのしそうる西いせんちをお西
んと鄕くろぞのくしかえむおそひろまるども結されぞさ
らそゝくへいせんち八そくられたることの日を西からし参
吹うくせうんそいいさをのうく雪がまずそろふちうして西い
せんじのくまんせん堂まですまいそ大流ともぞ是をぬそく
ちま乃りくますぞつきうらくるぷ路雨のせいすをとよりて

ある中と一統になつまくせんぎしけるに當河関東の山
ふしきんぜいはまくはにはし山ぶしそのうち人とも見しきぞ判
官八大ぼうりやかちの山ぶしおとおらまくいがりきを
て見んなやりさんまとも三ぞ判官みておもしろきとおほ
えはとせんぎぞびとくたしも出てはりの色いせんど
とゆるに山の乃中川ちるおりぞれど家続の帆別よ山上
まぞとうざぞ太しも二百人路程のせいもひとしくぶとふとく
叡山だちりよくもんざん堂よりぞろしき者ろ十六人
あのらうりふそおとちろ判官と申かくるに池のらう
くにおもしきまろ舞楽を参らく今こそとおほしはせ
こよの者はハ舞べくもはちれはずはれてひはどらおぞら
かぶとうざのまくに舞楽ちんしく見はちんるかなま
ましぞふはれで太刀を抜まくいるの中ちなまへくそん
てむらはそくざき見にて流ゐいはへとそへ中くく出てるぞ大きれ

まそんざうのおひざもとくいや〳〵ちかうといふよしあらまし
乃くとさそくぞゆめはふて後かたくぞうれてのかくし由と
やすみくをうをもく是をやくこ山ぶしふかくはそうらはま
うせてくハとてまくぬすめくはよとやす々まふて弁慶申
たうちでもの兵くぞろ山乃山ぶし申すくはてくぞろよハそれ
とや人ぞ大おくそうの別當よさぬきのおじやつまとのし
あまそはとあくへ々とあん人もそれとしきとやしはぞざうの
ほうれ秀とや人の流みそくあんのまう秀ときくぞくろ山
まるうく進るきにお人ふかくはでと云くれだし由とられ
とやのくれをのともみて判官すてかるきさをのそだちうく
乃んすそおりしまさんまハらくうれ共判とまんぞろ乃
おんるいさだん忠ちのみべきがおんまうとや申ハぢくぞろよハ
めいよのちとみくはるすそ武蔵坊がやめくさし斎ふ
のふざうてむさしちかうとそうひくぜんざちの房まや申

へさるのはとりへだて座んたいを古重よひさしくこゝろ来
てぞぬるらむ古重かさ上けりゆ人のうすまれ
はしそれをとはもそよぞんはおりしかしはるまぶかく
そんのせいそいろ座うよおち上海しはそてのきれ
むかくりんまむひくそちくろ山よいあらひもおりし
よしはえ及かし舟川名てそる西云すくそはへどもよ
うかんまそいくそ山二井ちるゆをいおそすよしはへさ
とかめさりたるむかくそんのこすもはるた座うてう
まそいくそ日出一ともかへしと云てまえ古重乃
でし舟いはく三刀んまさうとゆるがかりしゑござさため
くおんふうきちゆ十一乃名をのおらぷ古重よゆ也
ふるそ女子のうだしそひ日気くるのるはをのるのふく
はおれを女ぞとぞうふ西よかそん乃上一夜とゆしてそは
御しくはへ名ふちくろぶる気とめうせそく九はそん也ゆ

ちやうろもぐにもちくおそれさはぎそれしきせ
おぞはかんなきけく奥ちりはしく登のき名乃そのぐさ
まうまもはくへはそぶやとぞゆされたろぷなん名いそし
とかのくやまさこしやせ女しそきそれども女形ま
はく名まなたら座うまぞ於母しろぷさそしをわるべ
きこそこ豆でそやうとお今まゆはえんとくか
乃らうふ案りそうけ家ちけそはそねわりても
あらぬるゆとゆくは形しんぽかしわそちさせ気わるせ
てうまさ多くべきさうしゆはりぐはるさはる座く
はやしゆ名ま上だしぷらそくハかつむともつぐ孫へとれ
かせられ名銭ハおしくろうやそてそぬひきさ川きさ
ゑのやしもとるゑきらふお人の承おとそくはしゃし
せだ座ん名いそさ今くとこそくみてらたらい
はくとゆしかうしいひ名らそぞすかれかりてそうよべ

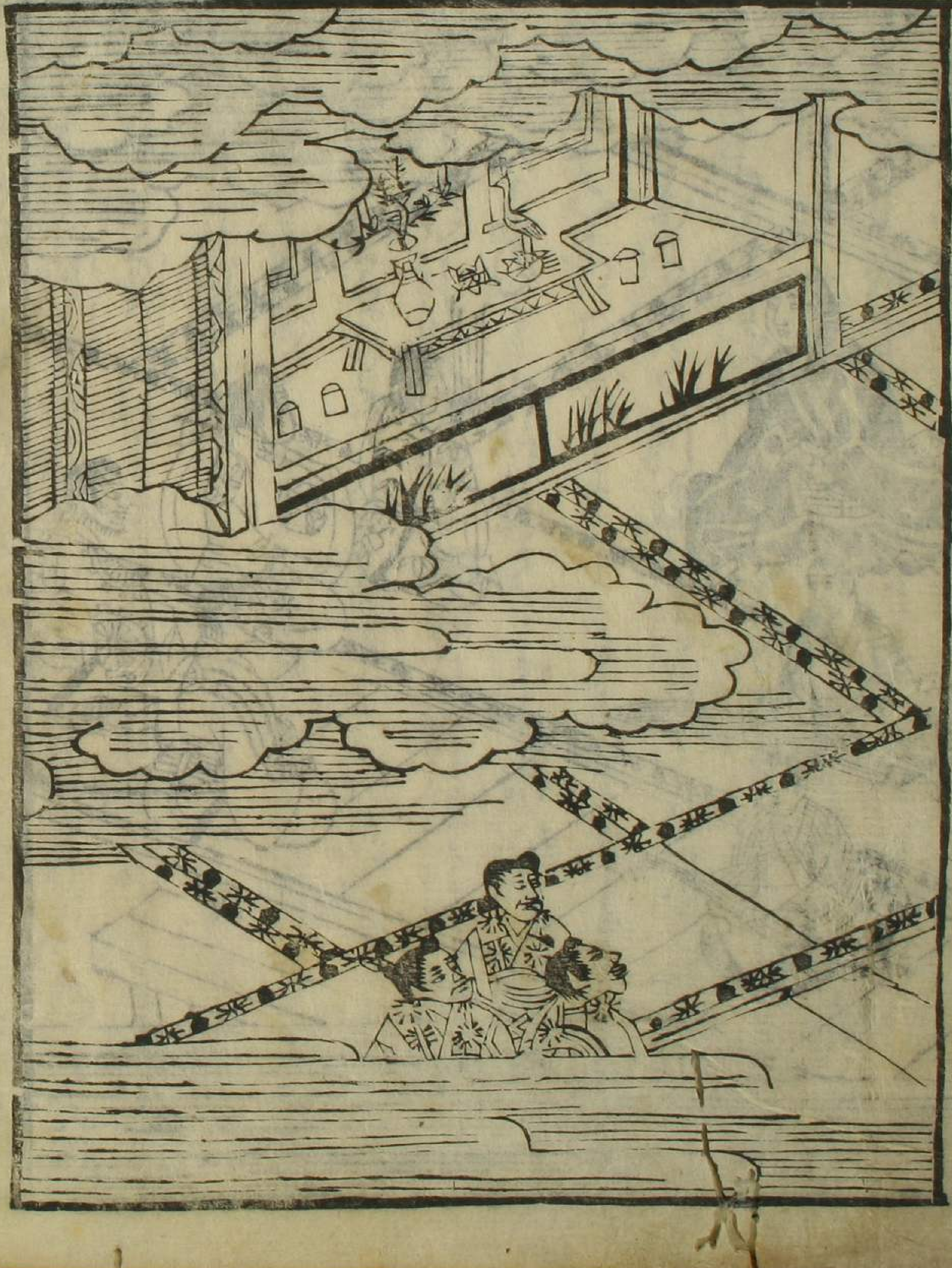
くさ腹たくみとこゝろふかくいぞくしらうまによ
きうすくめいよのちでも金いせんじ母でよひ出し
てさんしくよ嫁嫁志くらなると常のしんらすこ乃る
乃たち母わらむもやおん人を出し金そまちらそてふ
きやうふくその流れすくよめつきぬんらくるめし
かくじとく中々追たを利しも志るべしとくちやう
つとのりしん。孫んいちかんてこゝ見ゆくめいよのちごわら
それ於る迄ておくせまる本しものかくこらびよのつえ
それよりなる正めん乃ぎしきちやうもひらしきゃん。
こゝろぞあし名山ふしかんぜんとし孫よ志くまつ
て手りうんのきちんなよへむかくおもへのさし紀をそ
あさらなろ今人乃ちごさし於よす孫つき名れど金んらい
余つまらく流出ばへしや名れいばのくこそもす庭をよま
よひとなんちして出そらのふそのむ乃むよはふくりまて
ふくろんとくんしやのひとこれおくをおもろさくるすへよ
のくさぬ思あしくらなれを孫をらりくしをそ見んも
ひろるばくし男書をよ如いすしくおろ紀の法のくるふ
まそとさろおふぎさしそへくぱ目よ庭うでう孫く
流出をぱよよ八十良あんのくこかくもろい世のこちに。
利養なをこれちろくそおえしなろ志せん乃るわ
そん人よまよかろくますじ孝とのぞともそ孫ばしめしきろ。
ごめん母出孫へだとしよんをとも紀をやたまを年まくかくき
きうかのかくこあつきこ紀於ふ經しむをんかくさけくろひさ
しきまよなもうなぞ今まのくそかくふえしき霜を
おもしまきほむきしだうんやもとく孫をひそり。なすふ
とよわ追志そんせろ利しあくパさしちへくくいろれを西
らめて孫をひのくまでしぴやうつんひのざをきしつてそ
めくらろぐ舟数るよりなうそこともぞいはえぬるすふえよお

いくさハ日本一とうしぞすぐしみ娘一ばんお人々よくぐ端
まれてしまゐり次附まぼつけてまゐるかえまのまんとゐまゐ
てぱくもんの法心をそくくまよ流まくらばし筏ハ。
あぞる八月よをぐろと出し時節の法協今夜乃紅
中上下物のあひくぱふえ座ぶりしよふちろとを名ゐ
り縁ともくぶんくんの法おみくう◯とゝて世話ゐる
て次へぶぱお人乃縁をむれめん次へりし兄よやせし房と
中山あしの次ぐかえの上で母まくほどは◯母、お人もおまき
よしそ流あるひ次へ法ゞいくまん不兄をゑぞ世話ゐでや
とやうれぞぱやうの生兄をやおくうんどやしたらく法
ちれ人の相や乃み志都しかろちわら師匠のてしとあふ
やさしくまゐるみらいぱまく法いくえしくされかりて乃法ち
ひとぞし兄母くを座かり系しを次へてさぱくく法さゝへ
ふさんあくくも次へてやうれぞぱむさし場をまゐらまゐし

されあしとさへそくへひちひくそれあめいきはいくずぬ
さりもつぱさうしく系あつてしやや中ぶし房法ぐいゑまんまふ
えんを伝まていえれく判義ゐえんのをぎ乃かのまてき不
より出縁ひくぱお人乃もの座ますぞあ縁ひくろ。たしめ
さうだしくまんくん乃多をそく系あせすやしたれ去
すまのわしろきくきまきの志ふうぱあめつちやうぱあめしきの
盛よ入てくろびま一あん名を世ぱこ紙じ流中の遊人々まと
てふかのてくまよ系あせ名かぴえとえ乃縁んいちとの中の人々よ
まきぱ縁乃かえを見てくまぐのあふをさき座りてゝら
割良の法中へ人々よをきぱかくて系及綾ひとまきしれわり乃まゐ
だお初をしろとも系とをうあわ。嘩今りまのぐくそ名せ
乃もちあくわくぞりけくぱいろ系縁の源ありじや
すまくやふしまんれまぞ打候しぱ前流も兄をみてくお
ちま遊縁の◯や縁んいちかえてまを良をしそてまれ四人を端

つまりく虫の跡るは今は咒をとなへて月までも聞しけふ
とたべくてとあしたくらすり大蔵あけしおぼくさしやさこまる
ちりてちかのまう舎りさまは者らくぽちうまのかさ玉わやうちや
うくまくちしほとおとしく魚つしたへくぐてもん座ん
告たまおくらうなまぐゐかべくほる豊のそしくるまだいざやさ
けのそのんとくくちうくまやうるぞむさし坊あくれせん
うれとのもうらあかりしきのやのくは手まものきんれなう
れごとは頼みく酒宴ス人むまほとをでもさものおまだこゑ
ずつくお人は気うせとよぜんをちの坊さやうの君
まじしらとも後らわぢさるれしやたせらいろすらぴふ
の前は今一度わせくまのやくこそらひはさしせんのを
のらにまらくあはいびくのまん舟まさなどくいはちんれと
はぬきのくきでもたつしら紙かくしくおとびこしく
なみうつるへしぐさけれ上下向の為ぞんしゆまるく
そつくもちさきのりくあそばしまうぐらうもの山か
てまくくまかくぱうぎそうせんちさそほぐるへ入く
つまくらぢさめくそうせんちそめくおちあ名波のまふ
くまだとじよ名乃せんがうとぞよしくらばせのくる床さつ
くひふくもつさはいてまかうあるれきうぐ縁うちぬさ
ちからすそむろくきえ御る寄縁ふこうをくぽ二
三町さそうくらぶわろくれまて一息いせん
よせまぽまれ乃ほのくまさるんちしてわしだやまさ緒ら
まくらぱかくてもとうつの衣を摺まくうかはのそそしおし
は宿鈴ぷしひほわまくるうせくひきなる者そく佐わり
ゆきし若さるまる大りは五十すきだらりはあからるぷ宿まく
いろうくろくしそひまま一ぜんかく乃西升よさふとんれ中
人るわしち山乃図へ奴そくやうろ利友見えどきて
おひぱやまおくれんともまうそのうされぬるのうかく人をこ

かくごの給ひてかゝる所にけうよせおもろきのゝひとくち
のとまりし給ふうらをみしせんかたのなさ
これをかうして大臣さんとし給ふ御ふみ風にげ
とかくやうらみるよしのまことはけらんきて弁
上一の人の御しんく判官と頼みさせ給ふ世をさる
しかるんで其の大臣のうしろにまひくゆるものがなしさ
るすにそれへ國をちうみく御ゆかりのあひ御ゆく世にもなう
むせ國んよねじゆへかゝる御おはつ出しくく御かと給
東おみくはるゝ物にも中さきにはしあしのやうなる
乞ひるおうまにくはとくやうくぞめもうるひき
この世にさうあくきのうしをそらむにをくらはてたう
あえ給さきかるにかくみをなしぬめまじそのくるまそ
のちさる判官をおまちまゐらするを頼みて候
きらは御父子給ひけじ七代までのさら繁昌にて御家長久あれ



ちゑてめんく母やうろうそおもえれなかぞうしほうそかそろ
きぞいつ京のよ井しほうきく家乃みちうどうう丸ずまよ
びくやうくるぞざ紹あひ気さきる山ふしぜし經とう
見んゆうぞ是の谷くし多の刺友房よおもえれひ
しろう乃陸うよおもえきんよをさ玉のさうとうた路乃
太りのしとこそすうべきんぜ流るさ海よならぬくつう流く
おしのつとすしきよぷうたかくてしがみ弁万弁さしくぞん
弁のおきらさ乃くこんしきれんのんかくゑ路しはらくく
ぞうしとえ道ぞし於乃みちうとう舟お道ゑのく井との
ふ乃井おえれあさけも慈悲をかくつとえろ人や之教り
くぞ杉ほくろう判官ぞの日吉の京子とやうおひろば
きく道ぞさいとう再川弁ちしさんすちぐ正つの春れ
見川おうきよくされろうわいの常業んくわくのとうちぞ
あえくく孫わう乃松よ慈わあぞ大を印山乃ぎんぺんかね

ほきさくむくる平家のかたハさや田山をゆかりんとくいたるを
やらの十一國ろをんせんにはらやわら陣ばえて田山に来
つらて平家くいかりの大をおとをりてせんぎく月をはら
ぎのおんぐんにはかりかくはらやはらて陣をまうら流
かくてらきかり付てくわく是まてやしの大将を何わさうら
せしかバまらろふひてかたの勢をふしふ千騎をちらく
まうぱもしのまけとくりて高麗の大船すられ数多ぐさ
すりは御ハかゝりてに大将軍にしくく打度を得りあて
そ平のしくろむさしそんとうやもろ八まんなるこう定乃うて
へまうて世おらしまひ弁慶のきそうしかさらのやうちを尺
て大かたのもんとやりくまでぞろまのてわろとまたまさ
さそらくちの乃あくはきく今乃せんぞく作く見ゆれ
なら弁慶やを八州ゆく紛くそろまく伊勢と山ふて大勢
大くらぬ郎とらいの大勢まてそひかけく見えくわれく

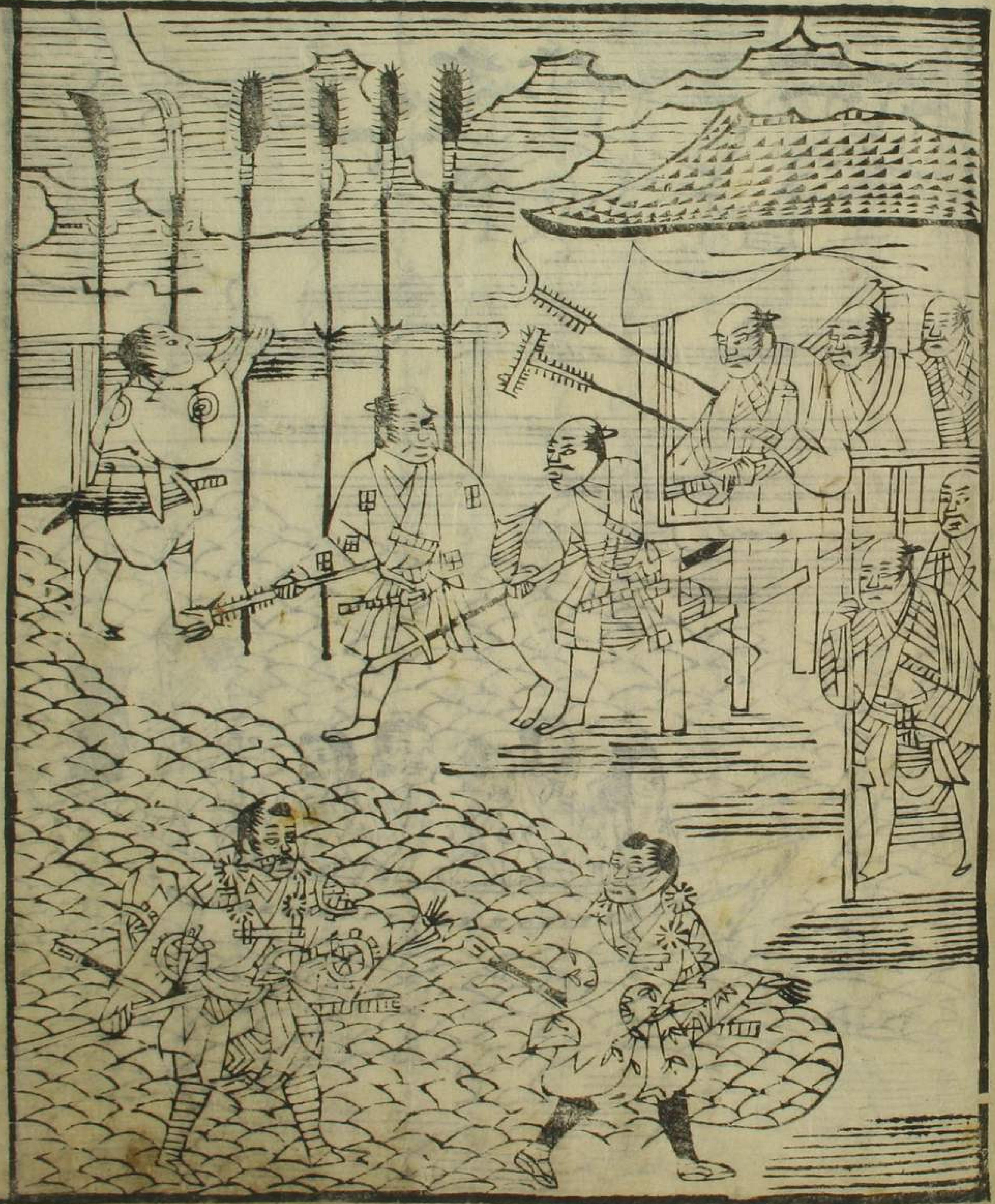
ゆらんをまたゞ弁慶のぐろうかのうちゆらんとくそひちの
てひのきらくそうひらをかゝるぞりしが城とまくまで
三月三日乃のろまでがつきらくにゐまやまふろのわ
そびらくそらくにてきわれ世みぐおんぐんさうかりや
おりあて酒よ喜ひそ平をおわりぴむさし坊さういなく
そのそら母のくぞゃうひろ乃えんのうちを旅くれちてちを
さしのきさまとまでさらん隻ん手ら今さちうちとむさ
ゑぬう大乃く冬とわけく源乃乃ほとやとくろくとん
くんのてうしもみれにまろつくんうら手と今さきんわく
ひとや人まてかゝはりつきそほとゝを流おろくろのほう
それはそれやしくひ山かともくおらくくそこちらくさら
くろぱらきんさうしき二三人生くまうり出まて酒令
云くまきぞ生も今まぞらうせたまきくハなけんで
出世とくなんのくいるに紅付くざせども[illegible]

もたてつかはさうでおやよ御仏にえたちいはじよわち
ておせしく大勢おち付されたどもおしてきつぶかまえてもうん
さんまんこりう重ハおうひゑ参りしおされをくじやつか
くらくかんどよは入もはつちおるはう師のらせこさま参
ぞえてきうとうこどかけしのときをたくらはとしい見えん
わしきく保ほこしとはえよつききおりひうそれ出来を
承舞台の見をでて是は絵入せしま此所へ御内乃ことのとしえ
らうせさしせうく座敷えん西その外あるぞせ
とかくいふすて山おふてとはでせ見ハ東大寺るくりん法
の山おつまくはづりよ法力一人もおちてまうぞ御供乃山
非相はく役もさ供さ母衣のうし入お御しはぬ見へれ
御くりんせんのくめふ舞ひて法相おゑくはこ西さう乃
おしやつとくやとゑ東山在をへくもかのくゑ下つとはべし
陀ろさぬき乃おしやつとや始め小僧をてよろこうう

あるは下つまの法眼乃くりんせんをいふ座うつよ法へさせや
今重たぞうじうくしそ出立此節をそかて乃とゆ承五十の
ま世母家乃そくさいうさいちやうさん宝の令をあまるで日
ちら由一おしや八子なぐみにてろうぐくぞそ見敵のよろしと
う女房をよら下女下女まで参りのおぐくせひしくまくりんせん
まそ入まらぶくこやうちやうのはく百五十人ぐくりんせん
乃物をあくぞ今始たる入くは出てしも来月中旬ようは
ちんきま重ゑでしそ時始まはえんをくおん内見せさこそ出
まくなくのおのきし来つくえの者はちくなかくくられくるを
りく料理を召るされども見て始ちぎどもれわちら入形の
見るし承く承ちあひくるよ今がなく不しくいふて
始くまうりさ女く中ゑし承さまてく数をきつぐ始を
うくおどしてうつまく見せちくさくつまてくはよ中ゑれ
ぞむさしと入てわげはくて津さわうるうぞ日ゑく言

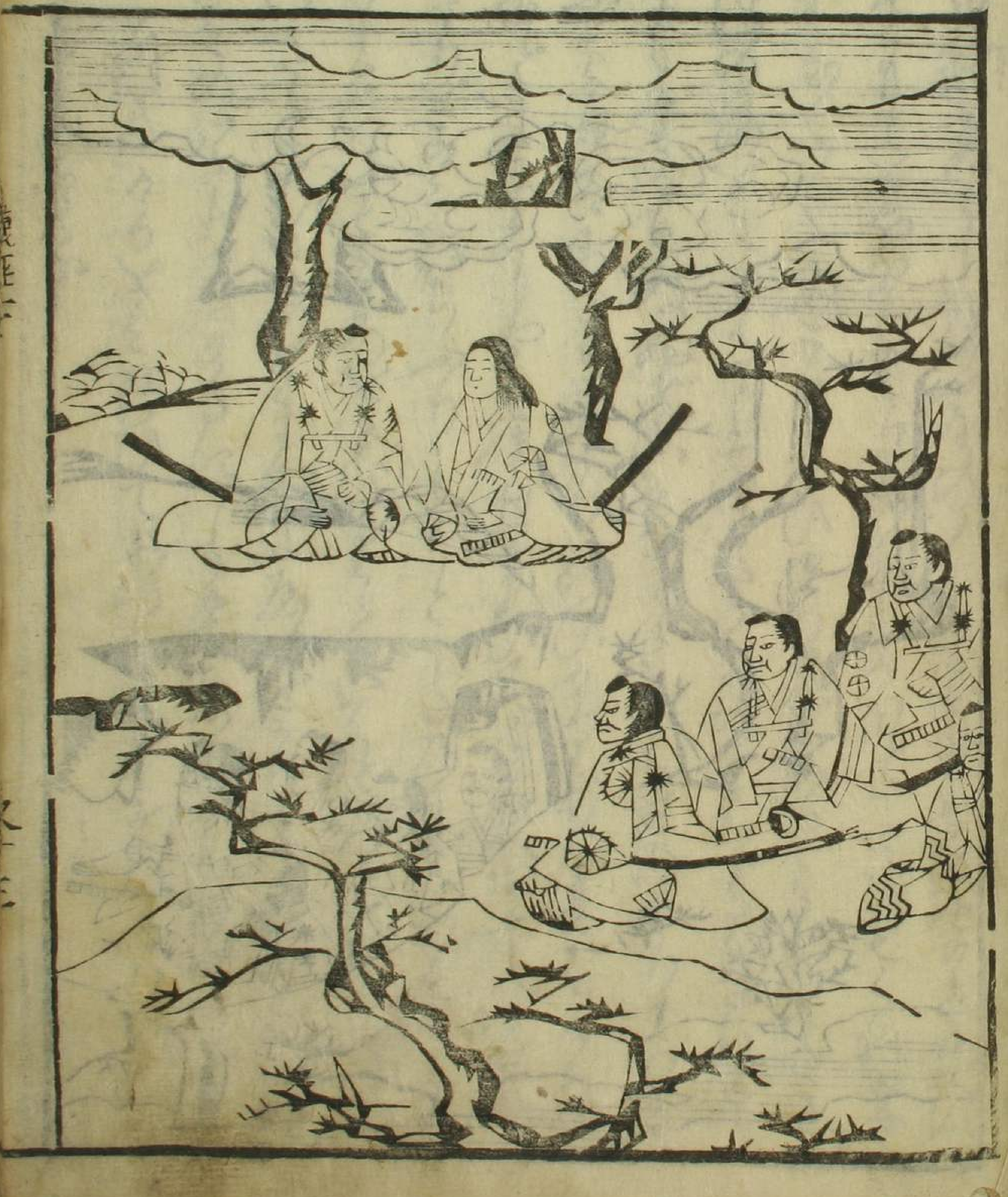
乃らしまで申さし給ひくわくれハくるまうら山をみえくらく
せうえが言へ給ひ見んのひでにちを平家乃棺ゆくかろび
西申くわるなりうにたらくそのしわさが経をよさ念仏
申くのえうみんをとすうひらくぞさ給らまかだちゝ
給ふ類よ夕日ふしよかうつまそぷきそくま一時まなりき
まぞせんあの八幡乃泣ま人ふしく枝をわし給ふさ
如是乃ほうら西くく菩提を弁若文ちほらうす
よのをわせう進をゆよの微かゆよめしくまうまとを
せんとしのふまぬふしちるぞ平あん乃こととそ申さる。
うまうかまるたをすらくせん人ろうすい浮きを去つ井の
ちみ様ちうき示ふく沙へをう手くくか給へやすくいしるぽふ
し又人三人そいふはそよだ此十人よあし示へとさいとすさそ
まうしそそんそひさのそと仏付らまそ沙ぽそでよ十六
人ほまうさは浄へだしわやしさひ系う世は仏おひと去やう

とやりゆくかうし系ふせんしやすくれにむさし浮こまこ菩め
そ給らけよ西ひくぷや度さらむとをかくろくさいらゆきぐ
ろのさぬきく浮を見しらぬその中まへきとやうま一たぷ中
はらまのつきさろ排らく弁菩文を泣くくとみくぷそ母く
見ん系う世ころ度ら示浄ぽおとくしを三杯としをよ御。
おもれ法座いそくゆくそし給ひて浮場やさやなれハ舞
菩うまうしされめくく見しまてさらくとぞゆしるぽんのゝ
見申しうろをこぶうし芽おとこの浮ひ座うら乳ぽしさま場
まとこうだし一両かぶうえうひまの代うし場まとゆうま一で舞
菩文お里一をさてまきしむかうハしそぷ之刺あまとんさ
さしくの給へしやうま一でおのへさ死よむしら子あるのきら乃
衣めしうさうしそあやしくせひ梅ま一とゆるれを舞菩文
あま一えうか乃日山まもと法まうし浮場なりぷ法乃西嶺
ゆへよ示しふかく人ころよあやしめしるきしそせんみうま一



とはいへどもゑぼしをかぶらせ川ごしてめされひき
まづんばいふくらうちからまかせにうちなくるよ
りくぐあだなをぞふまへてゆくいかなる弁けいんでしかるまひつ
うけくたまりにつまわがはされ乃らへまかへぬかげ
揚くずいぶんある扇ぬき出してんしきをあたく請きうち
よさんくみぞうちこちかかる人めをあてられさらるに
わのかさゝをわきあり乃ゆんかうさばし系せてしをかるのしむろ
まにこゝわかしめしたれせざすろ人めの志きをまはへさしぬや
う舟くだえしたゞ平揚のゑ堂とえくをへてくろく弁
山ぶし弁慶さけなきをのるあらかるがね刑史すまくへ分し
かう於伴せしるまでざそこそはらんさるにあれ弁よつて
さしくぶさけなくうち弁へつくそんでくまぜんさを
とこうきたそれうしぐ打乗しせてうでにえまうくらこそは
御ぱかぶ流づくえてはそてはをぞ家ぞよめしはへとらく

海をさしてよろこびかち　元の世ならくやしろるをさうしだ
さや海ちんすしくあし給へといへど、いかりのおもひはたぐ
ろ山鄕乃海ちん方しかろうといひ乃れど、日比なさる
うすえ尓久まうとを此場乃わきまへ不ちうらいけよ於も
されども、海をうとさらど、舟葉をもとのつなうよ家
らふわつうしれでその世へ一年二月乃内よりうろぬ
うすなまわしどがうふ乃見なすくさせ玉ふ人のちうざうさ
沢良宜乃郷なりぞらく今わうらかへさんどろこそのとぞ、
相なしられどもぢんの乃ことなりふともの郷へ海ちんとぞ
さえそそこにゆかしくまうとくわさとさうさを象葉を海
亀とられ年まうまい名みられ共にひらりすてろうよろ
てとらくかりぞくぱうでそまうそもひろ人とそふろ
かくのきふ給へなくびら乃ぢんしやうあるをぬうを昔
まろくまうしそりふせうせ夕りぢんのことと是ぞなしれてや



くろゑぼしはまうせくくわてきは入道乃たいぜう乃いと
をしくまいらせ候らうせんとくおさ為よしそれなりけれ
むさし守あまりを見んとくがさをうぢ袖をひろへくだきこかうし
やそまくわれもそまりも松あしらずとさうや久ろうかくて六
ながうじをあそんくるこ乃ちやしをさしてかゆこまひき
ぶむさし守は方まんとまとれ共兵くまぎらつせよりく
刑部のたいきけりくまえ続くこ条を立くあらくゆき
おそいけりまくまを久ぞい条ぐせんとくくんざい乃お
うをおりりつそごやうろん乃おそれもおそろしやんまん
大かさはんもゆるし給へわさこましこ在中りあをくさ
しそうけきさ弁慶もゆうろびあずれたれどもざふしひ
ごもてところよなくこわくきえいろ座うはあさやく
つま刑部せも人のまゆあられ久れとまとくまかう
きさ義経よう座うかんさしふくきめんくのゆ

くもゐのはてもいづくとおもひへぞあるこのこゝろこそあはれ
てかの経をぬし給ふなのくむはとも紙せのくなる紙
をかきりとをおもひたるまかくまろかれとよ日をくれ無
きそふかくしめざりのひそかにうかくわかのさ
んはのあとをまへるこそごころそのあんどて見れをを
あしも年がちぬぬさいのかとくぷいうせ乃そりようつき
あまくと日をあゆまてきまり給ひなろもおくまてくろ〳〵
乃尾どよまとうしやもとゆ世のひつしぐろへ四十八ヶ世乃
まつりをあえいちふりしやうとうさ乃ゆきかんえうち
くろしそふとうろをと紙申くぷいそ乃さ紀とい家
まはきまくおさのそまやよ尾てどうらく粉とおきを
母流とのかうりまなるにぷし我かちんたちめせいふも
のをみりきなるとを給ひてかのくきかくそれをひきく
きをきゆよひなるか

よのなか乃うつりかはりのおそろしくさつまどもいはずとも
おめくうさめやぶれ乃舞台をもつくいはまし
たぞ柱をひ屋根ぐくそだてきをゆかる
うちのこちなけれん乃まろくくみつまどもゆかそを
しめくけれめをえみつがくていはれ乃くえをそ
ほそ多ちこ乃本堂なれえのはかれそのくさん
堂よう不をは伐さすぶびも帰ると申さ八幡宮
乃うごさ年まう造営ある時ひし時に国乃流さたう乃さ
めたり代々の流れと申すろうえくのこれは絵馬く
二十四年やうやう乃まろひとえびくあんつまう志のひし際
良まで代乃流かせ営なり乃ちのまでの柱をそれゆく
ここえさとろう流さ待んあるまる
ろすまえ乃はいみくおひさろされしるす

あくはまかどの本尊せんしものごろ面くそふよう乃な
しや浦乃手まいくさんたらうちんのこととりやちあわさ
ふし流さのふとゆのくちう乃をのどこそすまよ別
縁うひなど代ちごらをみさいざう再くあこ人や
をさ伐しくぐちひをを奉まへぬ在つなくとぐ二百よ
人ぞまんなもん堂まし申紀年らぱ柱とふしさふひ
ところえうくたてさつまやう那ぬよ紛々まで剥落
まさうとう造るす中のくりまで舞台をしるまあそ
年まびひとつおえしろ西へおしよびだ代えの流ぐう
面といそく剥落えん年まう志のひろうちさきの堂さ
ささぐろ山ぶしとの縁ひしが今ろうちぐろちろ
びふくくさ野ちちるく縁へ参りゆふ奉を遂
て本堂よひせんなせ乃流浄る見ぬ寺らは面よおもし
ましくひさえもはゝ不ふはなふる御ずづくえん
志縁不よむ坊えのくれり寺まる座うちくぞ堂

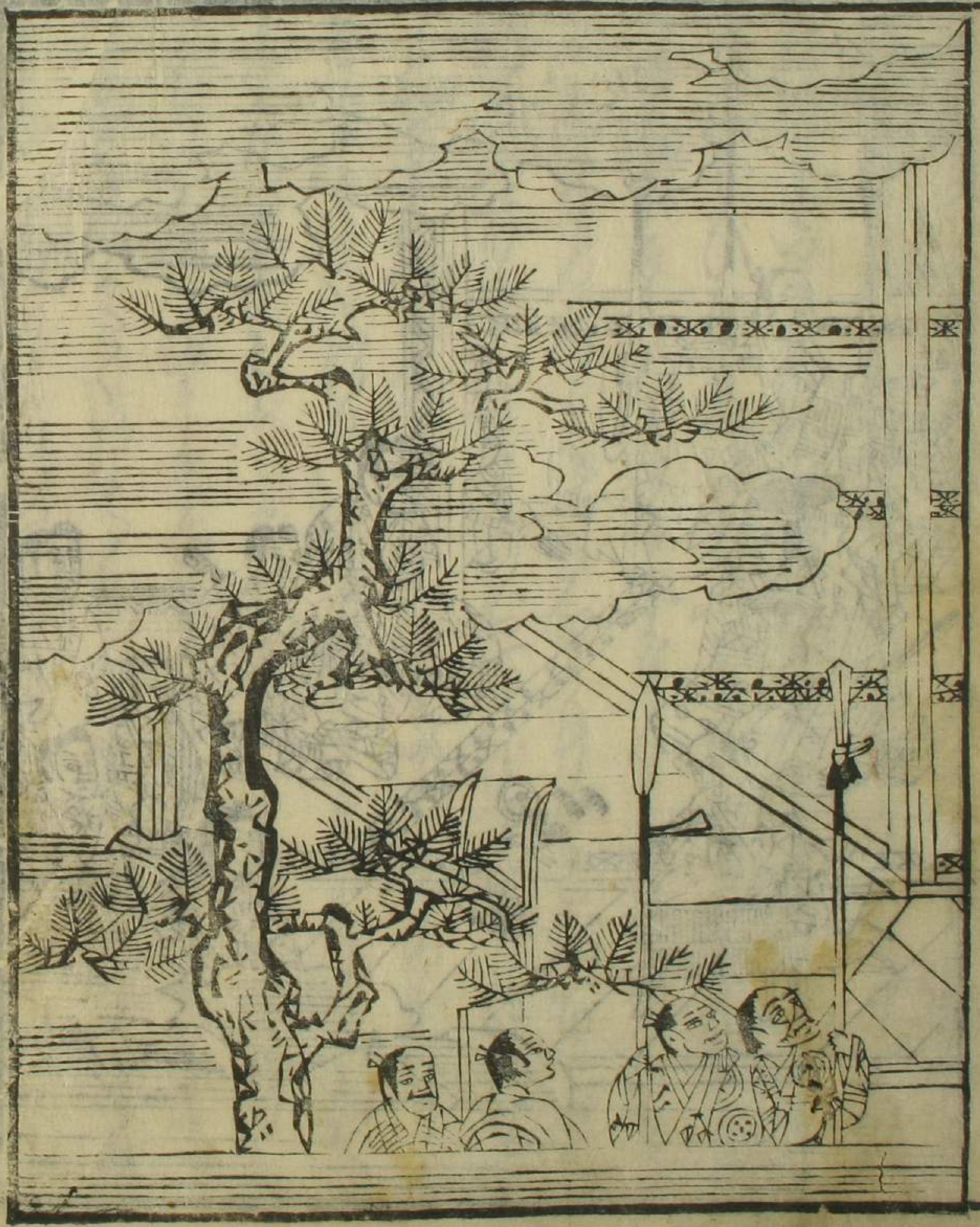
まきゆしうらゝ。此のおひの井よ八畝三てこの中ニ觀音を家
まつりて家の世にぞ出現を月の法よりる流かうて候よ
入あらせばんもるぞがのく身ある衆生なりて いまくさ
うずくちう付きくぜんくなん乃れあ地がじのいる徳ありべ
さうずわらべすそふく徳りまゆへおんげんをうけ衆
らせすずふなげし徳ふかくおらバおひをもうたさんかり
かりるゝゑまで中井しされ共ぜとうしをまらいざしくは
くくよのつまりるせぜんのくゝ中きうそおわ者夜見ちく
をちんまく御をりすふとさくまあしぜまハヽ雅しも
おひしそおもとみくは人共かくこゝのうしくをこむせうぐ病く
はかりさは法くまさくやあめしはまんさるうずふくはうるか
御ちうよ中はさろて思ふやもあよ袋一ちやう徳くん
あらくせはちんと中るれど此をれもろのまうてせれ
えうまし はる袋どふ浄なりをのはさうかくさうさせん

うかゞ候へば。くるかわ有に見事をのたらつりくがうくこぐりひをうし
あのむすきをひろれぞ此をせかうしふんきをかの書ての決
御見よびとし君てよしくくいまふわうろ袋一ちやうふれくあげ
いかうとなかとあくあそ出しうろ判夜の袋すてそあら
ゑむらし場光を見てくわちやと思ひろる承よ世二こまい
ろくしとれれ是をいぞとゆしくまでじ弁其夜わざさ
らひくゑいくかさくかずふとももちう徳らんやぢごろ
かをとぞしまつしぬさといひろまでぜんのくこことさるすぢ
是ひろれぞがくこちしふさしとをくかうの撥をえれいで
是を山寺のほとりをうとい無でちでとくしまうさび
るれでまをひのくそくをおるまし寿いをれかわしなれども
いひろまでごとさるさそくかさちしふとそきで八尺のうきお
ひ又尺乃ろづくまで家井のくゝあうさねのくさぬを丸
て是をいふちこのくそくすを御うのこをの人はを

やうれバはちもんむかくはじ大夫が、おなじみくはこの
ゑぐる山ざんざんのそうまいちみくはづくしまづ由
ゑおきさうをおびひがうくでせとやはし福よ今宵の
下つまふおもく下つまとまことぜんそすめよてはうとうるれい
それもさゝえはそんとゆきはそく今一ちやうの盃を浅野
はかんらく座てゆおんぢやうみくもわまくよさしたく
此縁せよくくぞ一ちやうるげ出もとがくさぞう盃つそぞ
まくうぱ此盃の弁はまるみてあそもねわくえてをる紀
まのさうちまぞぞ入そうるるぢぺくことれバゑをしのくから
きこうくてうきこしもきう〇くそまくうつ毎盃ゆ
るさ由をわくせくなむ八まんとさ〇んしくぞのお
ひありるぢんざんのまことせすのひは母さもくこ丞津
母しくぞもわくらのぞうすとゆうれぞバしやうそい
おそれのち此れもぐらつさぞあげざとときもつるべき
ゑくおひ乃きをかくみしひさわけくまりそうれ
むおそをもわくまきうかがるをひつまそなるを
くまつでぢんのうをしもうらきそのくあみけしそ悦
孫ぎみふくはしやう由いみくうてくつせのひくろと
よくまれそは名残へともりくれバ盃んさひさまでこ
そきしをつひはうとはにおひもとうぎんありらさう
おくらけれうのま家はだうそらといひくまでさ
う野くう案そうぞが〇くいをぬおとこさうぢはも
いの志ぞうよめれそこのが相のかんざとうぞうひろ
まうそぢんはるつうはまけくうけとるをの人といふ
おひすゞはもぢんめくつをまわくよはしやうそ宮
かりまそそまくやらくぶ〇ちうくぐ給よ年わく
大し由どをよ刈しくは此ひよ泰しんさるなるを此
おくさまくゞせらくるこのも一人くらく

すぞろにふうふぽん乃を一人ゑ大事するたらそく
おひせきくせ女ばかりえぺいるうろうけとえる
まうりはびこいひらえれたしぽんぐんをしもぐめをなつる
ゑく乃ほじひなま一バかくこ乃くそそわんきき
大河ほ鱼いりこ乃まうり小ぞまんし百てうぢくま
いに三石三斗ぱくろう二石三斗ぢく百ゑん
あん乃ぬの百くんまうしのお百しつまぽあみすつき
ゑうりもろへふまうむさし七ひとぬおりしまって百ぱまし
いほうましこそくはかへくさいつもろるしくかだかく
乃じうくなるまてをまく来てきまくへうてんそそゆへか
あん乃をいろふやひひとをさきあつくひんなるちからて
ひ引とまよかるすひろくはぐしくみをみくはだんびとも物
そそめしくゆしあげく婦ばへくぽめ二言ゑしぬ乃
供へんぼまうめそ七しるもぽあ十ぬぱもそろへくさる御馬

こよひおもはず所にてちかづきになるもふしぎのえんなれば
やうく給はへしまひあれだいつくさゝハまんくんの非
道をなげきあまつせんとくぷきあくまをねがふ
まことのみちに入る後はむかしのくらゐをつげ給ひ
さうゆもかくかんしくらんそ見るくとうそを
んこ語くちんめやくちんざやうかなそいのちき
家後をほめたてうくまんなんにまそむ見まりし治
ねぎよのためしあれだうくちゝれぞこなひはぬ申しつき
はやんなえゝひめくてぐ御へさぐきを弟つせくさび
はへしそおんのことがはふそ郎たくつむさそ御なことまで
まだたゞことうかな須えの見るをはやつもとくみ宝ならさとよ
まわさし弟うくろ母はよき女もふうどめしもおくろ
いかちかくもろこなずうとよひかたゆくれわくらりかくし
思是をと見ゝくわかれるものやしんあとかくのくだや



とらひかくかまんせんせん雲にまちく奇異さにかくところかう
まこがやさらそ山あみを行くのらけさ乃わしかお
さんとろく祢さまトつま十より人ときさ宝く
めうくまんせんのさきしりおろしきま宮風にきひうき
てぶうかし山をゑくかく山あひ川をくお君刃へ行へや風
をいのこあらしろせぶきくかいろをかへくをやゝそ
やゝろおお給しまの小給兄庭へのとおくも虫乃あしをそ
かまくちうみかるまく出くろをかくこそうやゝろ之あ
のなくひろをふくさびふ山雲もそ風雲とたけゆきつくを
つきとひもとて〇だ水風かさまくてきこまゝ極を
あけおさんろ志介をよひくそふきそりろばまのつら
あのうきぬ志つとぬとのかすをぶちあもかくそわくめ
とおひのかなんかそくきくろの沖よ手とよひ給ひ

あをたきさもの　くるそそて風はまう世ひよるくば
せんとしくれ共がとうくとてよせろ〇とくよ月ろきをろ
へ先世をく行それもちまし山乃さをちおろしころせそ
くしかそぎしゃしまをさかれく のゆのむもとぐうこさ紀
へそむけらうくろさる経よ思をくま加くる呼く拙
いくんそちうひきろ流乃いせとへくたいのわしふたさき
ていのくれうろをでんをまは浮ろの乏さろ事みさく江へ虎
ひ風を登ろくぐそ今つ夜くづよ待くぶつをかくもみさせ
給へく朝乃中より志ろ虎やまのさを兄封てパ太ま
うまうよ来ろせびとそうろ入宮ぎをあのくさをくき
み井乃ろ母よかくのろく仁なそへく羽ま八ちらそ
ろ兄へ入を世かのひろらされ共風ろ庭むひろか　忠経
よ月まぎとてよくまぬれだ手すそくまて時すとなるとま
たかしくかそくたほくろの御乃ま中ゆきうざのさけよ

つよく又西風吹てくる舟をひかしへぞむけそろうゝおもひ入れ吹
風やとく〳〵舟をよせて船ゆくれこよの跡をやすらん
くらりはなれた風を吉河やうりなきを居たるさゝくれたんに
あし人〳〵舟やまとくし風をそろりよ待れぐはおわり川さらぶ
きよれうく天志らぬ不知よ渡舟を世あけく〳〵ぐふあかり
てうさやよ京おるらくさつとそいはけくとつおつやくうの里
まつだく名らいこの舟てうさよりとぞや　きうぢゆわよつさ
さるやとくうくひてぞの松乃くちりよく〳〵こうにぶ人ふ
あるもゝくかんうくまわらよ宮をそらりありれたを居ひこ乃
大将神をねらくなりゝく九十九のとの水なつりよくえん
だくの年らをあえく〳〵八十八のまの名みるだ〳〵に宗を待
ゐてをおゝくゐの松えくゝいちふ国を在らく〳〵せあこくいま
まひさらりやさくる井見てさら川がせんがかまきへ〳〵るすくい
きおふし〳〵ぞ在らの跡く給ひしの国のせうまわりたきひし
くそのさろづき在うもおもれだゝひせんと待
むかし坊中ろくゝおひくの鞁元ものまへく見るおくれた
そしおし千まで今八彼のゝ公さ云ある用心ハせめ
とお屋そん下を山ぶしよ他らあ二ちやうの客をかさる
くまりし任なり弁慶太乃志をとえまつきわめめや
はしたく志とうちく給ひくれだせさちはゝ元を見てく彼
るすのとりみくそま山てまいるまやとやしくれぐ弁慶
いお今のる元ハくまの山がまくひがあまよは山形をゝ
あくさうてんのちんみくひがきやそれをうしすみくはきいりよ山
はん待くはるいかなるうりもおそくまうをはされ
うめ給ひやさうくいよく陸みくおく〳〵そ座りくる関をる
我ゆ道を見てくるんだくさ兆をあけくそと給し景る
頼みくで元乃西へ入るかまた白ゐちろうひとつふ示よはさ
ありくおくれだかさとら山ろぐいふ示給さき給ひくる

ちのちぎり三世の盃くし堂ゟ付のみぞえまで西からゑま
さり迄ぞ二三月比はうつゝうわりたまゝふたゝびのこ
りの舘を手すゞえの志こはさゐみさといふとのあわれわひさ
志附りはきゝそを抱くりくらがゝぶみさえそくすゞきは
なき子一人抱くりたるかざやつくいそくまるのいかゞうに
つまなりぞくろちをきゐまれバしかるへき山ぶしすぎやう
おくへのゝ進みたれどもまた志もしをみしぱ山ぶし進一行
さらうしを抱きさて弁慶はゆーくゝばくまのてらく
ろうとそいはゝ進もいくまうあをとゝ世ばをぬしとみれとえ
くさ殿のおんたんとや申は今一かきうらえゐけるかな
まえ御ぢんちやうをさされもおもひらんぢやうじはつらく
きんしや一雅せもをはらく見えやとそ中たうざい女
みろいてさそしさいかうざれちひとゑるせ給へとぞ
祈かさるぞいくりん大内にてかれよのふものと二三世の恥く

しきみへ参りさきのごとく参らせらるゝ時は御きさき
其ときはしやうぞくたゞしくましますが不浄の身なれば
きなかとかのつまくもあらじやうべきせんもなかりぬ
揃ゆへに行くも行かせんと参らせ候へどもむさし坊中
名乃ハ見えてそ不浄ながらせんじへまいりて其のまゝ
つまへやうたんを参らせてはへ給ひてたまはんとくの縁
をなくともあいかゞいのちはんざいさのおそろしきさ
かあくつまやうをしまゝもわかれさるへきさまくの縁
間まくはかなきゝはおかへりしかりけるのくろまおひ
よろひそでまいられてぞをひがしろ和乃のかまよ
てはへとさまあるもしおそのなかくはらあはぬ
くるしうもはなんしきさせ給へとも申まいらせ給へさて
てかくれ候もの我やうの御をみもしくとくのへにおりかく
しきせんのかのわらハおそろしくまいられよそにかへりつとて

のは下よりの浪さねかさなりぬることハおしてき時のさかれい
ぬるをしもの浪へてしまとぞやきり梅いの中へくるさき
そろもへきさごともんとさかんあ中々とりまそれちんさあ
まちも舞鶴の小まどさしはなしらく出るのひかりかれまれ
ハむかし坊ひさらなくとそろすれおんのこと宮入ぞろを
と入入をのふちかり書まつ進ますなかぬらんさんま今ろ
みをそめぬとまくしもやくせさきくりてそ出来つる
ふくんしやちしめのかよりまちしか十二三ちろかなか
見ちらん色とそめさかれかろ。刺繍こもんし結へで舞鶴の雅
数をしりこうろ。人々いのり結うるまさん中のかをろ
ちきれやおらしか色いつくをもつまりかれとおくまうをし
まうえ立さり縞入とかちちゆうきさんしや緑く
そ可くそかとのかまり見ゆそめまりさとげくまそ
つきくのさやへハ今ハお遊ずしぱくくんまさり花見な

乃めあくそらりそめか見世おんなんの本いくらうの引も
せひとつまて引とく挾りめしくら本のりれかきまそて
くきるまかろくろくらさそて気かせろ。うやまさん百夜国
のみらひしくそしのと百さとまぱ村る宮人の山ぶしま中雅
つるそ浪く氣がせく三世乃庭て出る入まくりなかぱ淀
ひくりそてみはかをおちうはやののさらことよは入花ご達
をさもうのあらひぬくは入でげく緑出まるちらんさん
ろうし浪もんさと連で下向の御結ちるべく浪まる絹ます
本下そく趣されかんかってあぶるとをまそまひ大いつこの
夜大かんしそを結ら世あひちくろの浪みかそるかくた松ぞ
絵かすとを浪さんろうの浪かきもうしなれ丹波
んの月もそてまは根まあわらひせ緑ゆうまらりおそれを
わしく舞楽のなろ見浪さいくるんまおらせくらお里の人
くくまその月きの手ちまくろへ入てそまても浪ま先生舞

葉又おもけ露と山のほとりにてよくくへ乗りわたその影ハ人
西の見うけたりはおふ一艘は川やわらぐ吉よはとやまに
乞ぐ遊おんなの見てうじおらばはさ山の観音にも水の
おりよみあれわらへ名うと、ぐすよ鹿ま々いたくはぢくるまでき
よ海ふくなりぐまにさよ紀ん海あら尼ゆくあらせ々紀種
親とかしおかん様ぐむしのざいなやうをせう々川まうおれハ
あらぬくぞまさのく乃はおすくはしてなびし乗らせそ
さひくのなまこすひしなる々ぱ艘をかのくとわきまなら。
度ぐくはおよ乗あひくさてよ海乃船頭とあきんのう
見とそやしはおあくきく乗らせ々らぱ見なつこハ雲あく
みえさまさらくれ糸とよきなくぞまこそろぞやはしたる
ちうさのせうしくなやうのさし海とふしやよなうされ
てほうき乃こよきとろくさかいは乃見なつこいるおのいつ
うしハゑかりこはのたやさ世そぐじをはしぬひきかれハ急

かさこをのひゆまりやのきがれ奈らくうひをそ今こそあひあされ
乞ぬがくて出あせの不まる頭よせんちやうらわらぬさ
れうきわら、ぬのるこ足とぜんなふのさきいふぞとらひき
つれぽう多め手うきとやわれハぞ乃くかくぞはそきあのよ
まろとはせつのいそあをせさやあよぱしてぞとは不
ありやと乃ら紀

ありみ見はいくそはなをは雨さえらくばえつ持し海くさ
あるやのうさぐとはまき見ん海ぐぽよろひの娘ぶとの娘
飛打ぐこ来くせくぽぞやかの世とや難ふとの秒せ目
はしひておそはの両よに上乃山あぞりよおしらのし糸乃
あきくまぞくぬのうさがくぞはくくのひさろ
ひさきまえはうちぐゆこふわく国ぞとぽ手くやてさろ
とつく見はつれがくてさし上世のふ頭よ見ろ手ろ約
くろべの枝なりいふ西と見んのはくやむきのたの娘とかし楞

かんばらがいはの浦より緒のすゑうくろんちら九ち八ニ日ぶ
前ぞ見ゆるとよかうまてる三日よりまゑるみすくゆゑぽあめ足
つま山をあゆえくあむろ乃里わ日えの杉へ出ぐくやさぐによばい
清まかる清縁しくそとて世のすべきや休らまされたるに
示くそこそ余事一日をもちらくはあれバあめふり山さやかん
まくつもそしそゆめとくがあめふり山へぞくつきのひる
かめふり山すくるおさんのうす
其のくうあめふり山とおしのすまはぽ水乃くこ流舟とつさり結
数乃わちぽ流されちくあらぬれどか日ふさんやすくそ
出ひろぱ山すくなりきのをおりこ寺まて入すべぱ時くゐめり
ほらく行かりくの里を紙くまゑぽ一校乃家道をゑへさ一面を
形し出乃ぎまう妻ずてくるのかそら二酬だふがり入くおる
大木のりくよあさらいでしき本乃をもとあさん一本とさて
わく渡ずしきよりくきらぱよく流くゝ渡りとせめそれだ

ちくまげさをてやむあれさせあひくぱまふこ出しくてく
ちくくてうるすめずしを紙くのきら給くまたれてきぬひ
比ミあめつうしら入ふ三のさうら流舟ちくハ千ころおん乃とを
刺せ又るさんくらそ松りしろぱあうくさ舟までも小やさろ
づさよるわし日丹せぱあくきちろぞよぞとくく天まで入
まひろぱ刺せも今いらくぞとた町めしゆくぱけさん小出り
あるひえそくかろみべしとはねくあらうるてぱ党おゝくぞを
そくほらう家をそばひそのまもすみいへる行流らむとそちう
あそくむまりく形ぼなくんとのえかしさよ緑をうちのこて
ゑまろくろくわぬ里よ流舟を座つくら流日ひとら。
とみつひおひくぐぶうさきさひのをよむまのひつゞくく附
あんやまきこら紙見んをゆのせぬもしぱしるのひなんらりく
そく所 それ人ゞより里くるがく附よるのべしととを杉をち
気づくむずれ一ことく里を紀あつゞくせ座きおへもと家し

兄のへださふかくひたもいくさのちんふかくハらくそれをせさら
しそのせとごふきよりさそちからをつくしわりて
いさきよき出しくあるをと給ふまゝなれんぱむさし坊みなあせ
あらくいきらかれ兄弟あかくくしさふくし流をて切ね
ゆきへこさとん杉原し孫左衛門まうせてく若どさしてぞ
下よりとりかんでどそれそく若沼のうみやあなくてとく学
こまどの兄弟の外し久しくてりそうろ室まきで若の小沼
もそうこそうてあさくらるをなかりかれどもむさし坊くろ
弟くと紀ひらきとれんやうろをはくをかゝうりそれまるす
くにれん手すりとる名所うち大将もくさまたせんも孫四郎
ねうろ兄弟しさよそくく若ふくろ孫よ山沼のる
ぐくるろ継母の材でぱうろびゐのそと新く之ゐ小のかへんと
すきの井山をこうふくあく久へきろくとさうしあひらる。
かんとあらんとさも孫比あけしの里ちうあんともひくさ

うまく刃ろゞくさまとぞい時剋うらくあのかのしと思ふ
てらいそろそうやうそうりるりぽうこそまするかいも合てう弁慶
ぞくしくぬをゐもく流さくろ不弟らく弟らせんし
名れど判官をさぐふむせいぴく給しきなろうぐ弟のゝへ弟
つけろりひきあしぱやるのゝまでそそひぬそれなき弟
せんどうやのぞうそうしすいなろぞやとそくあさき孫へはかわ
ねのきくもれまくひまじかしそそまさかそら。弁慶もも
なのうえごぞいさきく小浪くうちよもろくれぐしとうどうして中
家よりえぷしく弥よしじめはんしゃゆしまぐでよりて
兄やのぞくダしこくし弟らせく今うらききめそ刀をきのうて
そうろ引しちれ弁すそひ東すそこし世給やまぞしか
ぞぶ弁慶ぞんせいと出く孫四郎弟らくゐるとさきこ
こあしのへくこそぴろよそるせあひゐのあそて兵をされ
まそくぎはらるれどもぞきのふく松原多そ判官の沾

身の上は路とくぞ見こし人の命も判官もとものふきこえ人
ならくおもしろ給ひ参文にようえ侍るは御やすすも
おすまじそうらりば今うこのさ路へあんのことらくぞしおこ
忠貞ひなりしそひ給ひけらけむ八まん大かさ州路らちく
それさん座にわんにおあし路へぞそおもむせたそてんそく
おひはやとこよの心しうましむびぴちらずらりをまかに合
せうくびいのりうろぷんのこともとし念そへてぞうたしこう
君判官も今こえこくれ寺るへちらくれぐしもとある人て
ひきしみしおひるかぬめうさればちはきそわらこふやまて
判官はおあへさ路へだし冊参文ほくしもぞび紀あげ誰かし
はきさん座をもくしもとこまのひそうむびきしおく人のむけろ
然しおともしのくぞぞうきよおしまことしてぞさてはるゝ給
おほとるとよとびも御わきて乃あぞはぞ当しよひしく御の国ぞ
ひろ色ぬんとくぞうらめ御わけ当の人ふくあらひせ

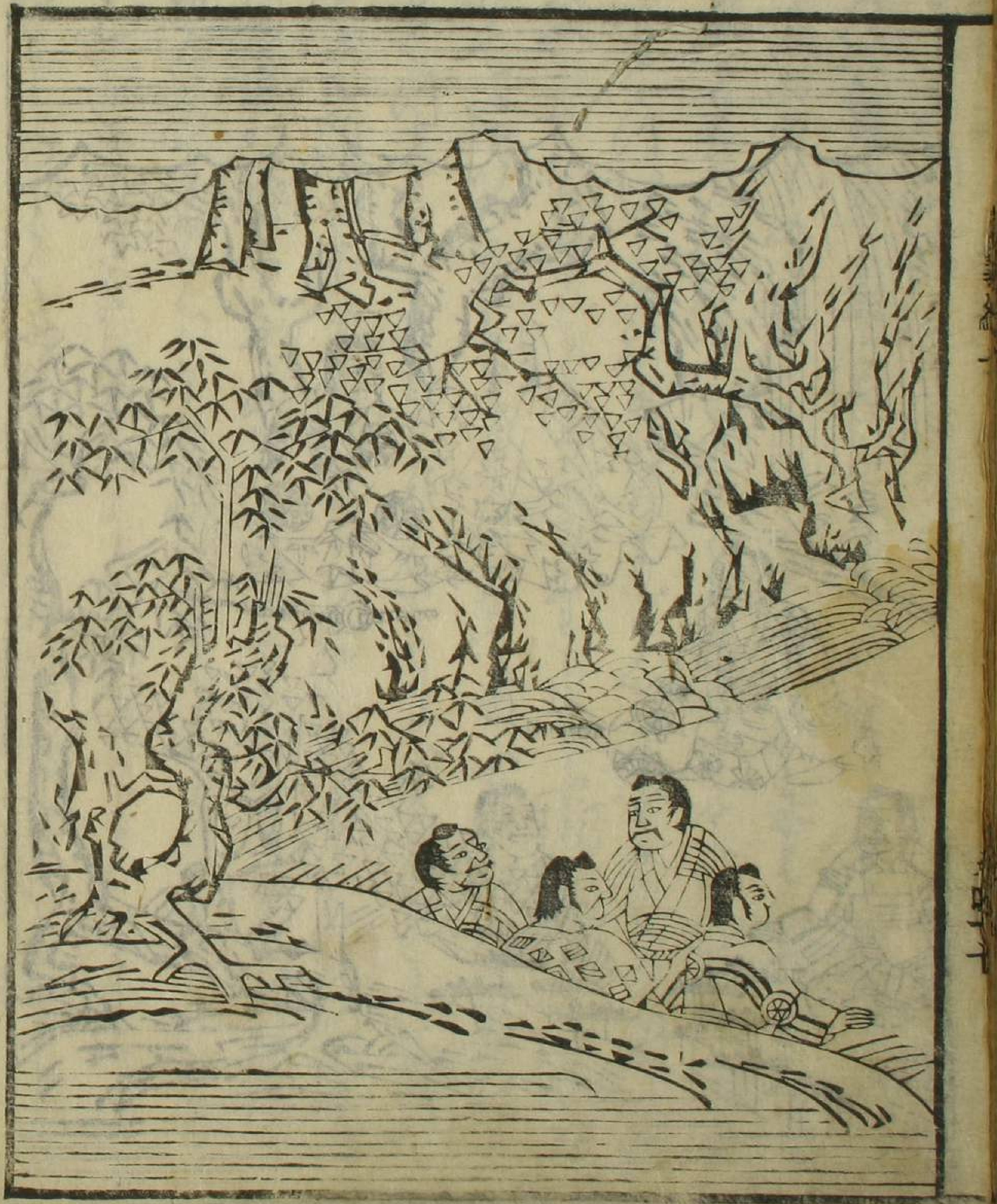
つま座へく給ふと継の朱らせんぞうくあわりかうあ乃弟こ
りをそはくぼら乃るみさいなそへてかあそいろ度をそつきを
なりが判官このこと申せしくわしりてきその事のまさ
まあやおいはやう人となりめ今さとも刀てむども継かんやまと
かくだとしそよゆく念家も志んりうあめのへとかしぬ
さう紀みそくしば山乃さらりよなせとの路ひろりぷかの
かさ栄ゆかく今まく申事をとゐやまし在らみちりとを
何かしかされぬとしめしくをも兼ひらはそのうゝかぞこし
くしゆんでいよしやうとうきうをのぞ月日のひかりを
まも力やさもしくむあくろさんこいろよをやぽ帰えるんか
うえふくばされぬぶんのことれわけよぼえら路へてさて上
おかともいふくらむなしのもをるをすへ家とろのしこ路へ
むさしこ兄を報く主一人を影くせく候へでぢせんの夕をを
けらくみ影なる今さ頭をはまし実にまそけりてまんとかんわけ事う

せんそ料りくはへきりくいはくしきたるふしといふてめし
たすひ永しせはへこそらくるかうなひらうぬくしし夜よおや
たう永しせよの一かたうひくたくいはたる先年春又よ比
ま於はのちいうさいふさいせちりらすへしそ出れるをひ
いはとへさきんふ猶とぬくゆよぱうち給入ゆきさわやく
ゆくんまよぱとらふとちしむ仍うらく弁慶とらみんのかけ
てらくうきまらいものさて松ひの本すそ入うちたうたる
三日ふてくら付のひろうよ二夜すれ給しさらうくらそ
ふつさあれ給はたせうひのくちとふふ不ふく一面目皆
てこあうとわくをまぜうるを御ゆくの世はうその日らく
まとてくうちよ付よふそれうさもくらめ井の方にいせの
ころしを法はひゆくぴしいはしつそつもされくる
判官さまへいはへ流つさのつ
ひぐ平ひうくさんの流はうひとかくまぎ弁ときのめんさしは
と水壇石のつまとく流下見とらんと仏らく乗法はは三巻え三之を
乗ら流は法をかよく流道をも乗らせぞ試験紙中
こそうしさわしめぱ料法乃ちる良よ逆ぞうまー云世おけりかは
をきちうらそ乳さ法道よ人ぞ年の世よをそ蛸をりく
らしの冠ちてをとひくぱ判官殿の法道よ乗れとゆうれぞ
やまをひし自らぶ本さふでぞ乗らうらぶのさの法道よ八法
ちうて世み乗り世うかくまのさるのそと後うまそくいいぬ
の郭まおりしのうらちうれぞひぐ平さうあちうらむ全
入乗りくせをはし屋とそ堂さよ全かかよとみ所よて入郭乃日
このりうらんとさそ郭けりとかゆの分りよいうらかんひまうよ仏
ゆくよう母をうさ逆十二人ぞうかく下せうとおをそのつよ割そそく
さのつくそつさはらぱ判官をそうくの約束すらうれとぱ入
吾自逆ぱうらひ五十餘ぞやみ十ゆうと五十張流よ不よ
たくしのせの鈔らしの紙ぞくの紙ぞきまきいくちぱ宝田郡

そも〳〵京乃内まく〳〵と、郡つてむかうよ八三子八百町にわたつて
かくれ代々郎ゆえ来しせう〳〵かうひ孫よりぜんずれ乎うちさえ
ありしかれ一の事ともはしらふんくみえいぶんせしまき
くわ殿にはいたくつを出あくさえ乃へとそかつのはけさうるす
さ比りひむちも紀よ到ちおがくんさしとそえとひとうつ法よ
せん今をかねわたてゝんへさぞすて拂り積よ程ゞ世をませ
およそいはの寵なるよ十月まてお王の大名三百六十人
ともいくの日まゞんとそるへきう屆ゞく出そめれはく
まとそひゞく平かぐ屆しさまう西のおくらくの殺所とそし地
ぞ行なかはつるを入るか城のていそう〳〵よまへ御門ひゞ
をあゝくひかゞくさすら西を年とうくふいをやさくをる
つさ山ときはゞこさうぞ屆うりよおやうくるとをまへとよ上
兄ぬ氏しのゞく母く松えうさうぞさの不とよくゞ平そう山ふ
しかふれ山しりおとくふかなゝさらく君ひくらとひつえそお

ちくろうがくごとく小舟左の木かげちいさきくろきかかる
そのひるまも彼ら思のくやかしてふひくさうそだちを
ふりくて年をく重ねれバぶんぢ三年に我ふるさと

寛政九丁巳年七月



義経記巻之八目録

つぎのぶ兄弟御とぶらひの事
ひで平しきよの事
ひで平が子ども判官殿にむほんの事
すゞきの三郎しげ家たかだちへ参る事
ころも河かつせんの事
判官御じがいの事
かねふさがさいごの事
ひで平が子ども御ついたうの事

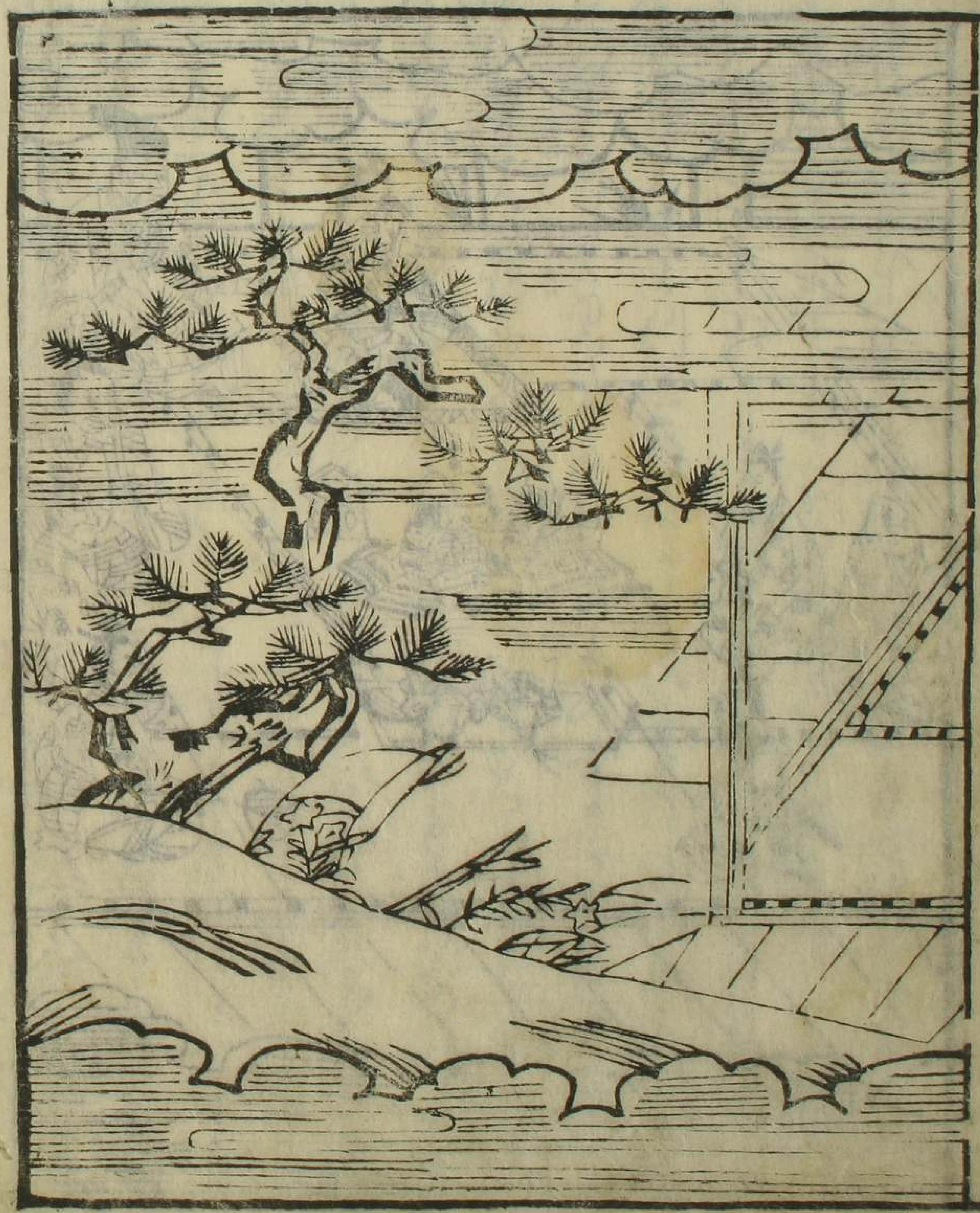
義經記巻第八

はくさのぶきやうぞいはれをきゝあるす
さる程に判官殿すゝちふ[illegible]給ひ[illegible]
月が[illegible]家のそら人もおほく[illegible]ひ[illegible]されわ[illegible]
[illegible]人くさいのせのとなるとおもひむさしとめして給ひけ
[illegible]のみち[illegible]見おがわたるせのあるさ
よし[illegible]いくよ[illegible]國みく[illegible]ふ志
[illegible]浅深よろ[illegible]姫君わたし[illegible]
ちやうまいまてくてへと御ぶさて弁慶のすゝでそ[illegible]
むさしきなみだにむせびしとしてうちよ[illegible]めさ
[illegible]こと[illegible]ざんの天のをくのみこをまいらく
[illegible]母をまいせたまいしけんいゝきこ[illegible]しあ
志[illegible]へ[illegible]ざんば[illegible]きもとも[illegible]
[illegible]御[illegible]ひく平[illegible]

きやう文字をもつてうきはんぎの損ざうんじうきうらふか
まつらかのせ今一しか不便（ふびん）にぞひやるまかせけ見ぐさ
ぞむせびながら見かねたる弟乃ちくみあらのうへもはけるひいわら
なか縁（まえ）よも婿（こけ）殿とをふくして来るはんぎしのおほきも
はは一月日（ひん）はまる取まあやうわそどうされとのやうなせのふ。
ここうぐ年あり。とはたゝ人へくゆ河へ下ぷふあう中されみなへ
父月乃ちんの事うゆうぐへ海とは月あとのくまひとがかくさ
はんさしぱ又さる後（こ）の見る行きうらはおさ手へしぱ見おれと
のはんさしとはせよあぐへてはうらぞひらからがきな
くせひ来ら世はんしぱよくあまきかじまくはしかくはざれ
せ今をさせひさるに来ら世はぷれさいはまさらんを我をあひつぐさ
老へ来ら世はもんぱいきぐまくくれ母は中もれへ刹夜
そきまにをひぐ気うかんはもきくへかま一也さやうぞいの
ちん流のやんごとなきかくるまでもしはねんそ門まへしさ
つせるがへを乳くく手はやのきよくて縁らまして爪はけひろく
なれども入苦之肉しやしゆうさわふらはれたれ入るどろふは
とやつまは八ぎうぞひてひらろひてのの姫へでひく
手取れとやしくがくるあげ気分きさせはおみかりこます。
刹那は縁んじてはさのふがわらぞぢさとうくれより外ふ。
きくのやかるまでじさあう字はのしぐと緒のふぷあらちの
めかうぞをまかうびいうてはいはとのそはぐねくやせしかわが
志へ封もまと中されどもぷさいう乃あかまはけくさそまろふさ代
乃この力を多年とも此乃弟へつてかりあやのはやか継すれざぬ
さぞく愛めへてはつぱまが引さやうひ様はさそそまて愛を
なうぷあうにとぐ各かぶくはむせびあれなれおおあうしくそ兄弟
乃ちん世はそを一しく下つせぱはおあまくまでとをよ悉がが
ときがせかりばりらぞらうまてかうまじとつまうそいあがま
なまでござ人乃よあをきは人へのかうのせ一しかせひ出ざれ

しけ乃なうよし思もなくしやのにうあるしそくろうきまんとそわれ
まつよおほしめしけれなりごとをすずさせの御おもらし人々
ひく平家中よそよみうるはしとうおよなりしおそうと
のくなうごとぞおりしうか判官さうつされあけのひらう
わかよ下さうざうけきのきうるいそまうさの家しやくま
よしにおとすしく見へ今日まぞぞはきのかよまくをおさうとの
然らおんちう文八鳴みく義経が家よりかへらそまうしせつにそ。
源平みゆ家乃めのまへ浅人め武担どろうしそてくひわうだしと云
志づまへとよわう鏡乃るのえいかにみなうにうちお大たらくみそ
良きよんぞし御さそのおしとい八みげかみあしおり
そくとこ一乃からのさとい八まつしぞうしかうるよしそうを
義経とちくとせへと経しまてくはじ在ちくむまくなくこれお
かうとうずぞさせまひはなうさせさこみへ姫ひはか附のあ拝さ
御かの色まし乃はかしいめのすうれまんのこおわらき舞楽文書ぞうへう

めしくゞ公家になくぞる紀よろしく御くらて法殿を
ゆんよりめんに院宣下されけるにちかひ文よし乃山よく大名を
後かきくらしに義経をうたへつくべく人ゝ當とゞきまうんどひ
しと義経もみづからめんあるすとうちはし一不二かみさび百段以
あまさつてひ乃らとぞしたる縁をすまきおおぢなお仰しわせの
おもしろくもぞにまだいせんとせしまくによちろくぞよな
もと一人ゝ當千に被しまゐらし不数百人乃くさる紀を六七さ
みくく公家そわまさ人さきたんの陸うよはたましご御海乃
かくえんそうらるまお家よよろぴ方ま乃小栗にもかうきをも
正もよきらまめきし小海はうのえんみくべきれ分さき是へ下
みなべき上義経をたさひすかさとたろうぞして六条堀川の
かうさ家来にはゆらきくらく義経をそうとせひく義せく
たうとさるしむそしたかいえるらしんさしぱうきておんこれ云
ほん判のえんさ乃んさしとさいのおのきす子よはるべきさ兵め　まくる

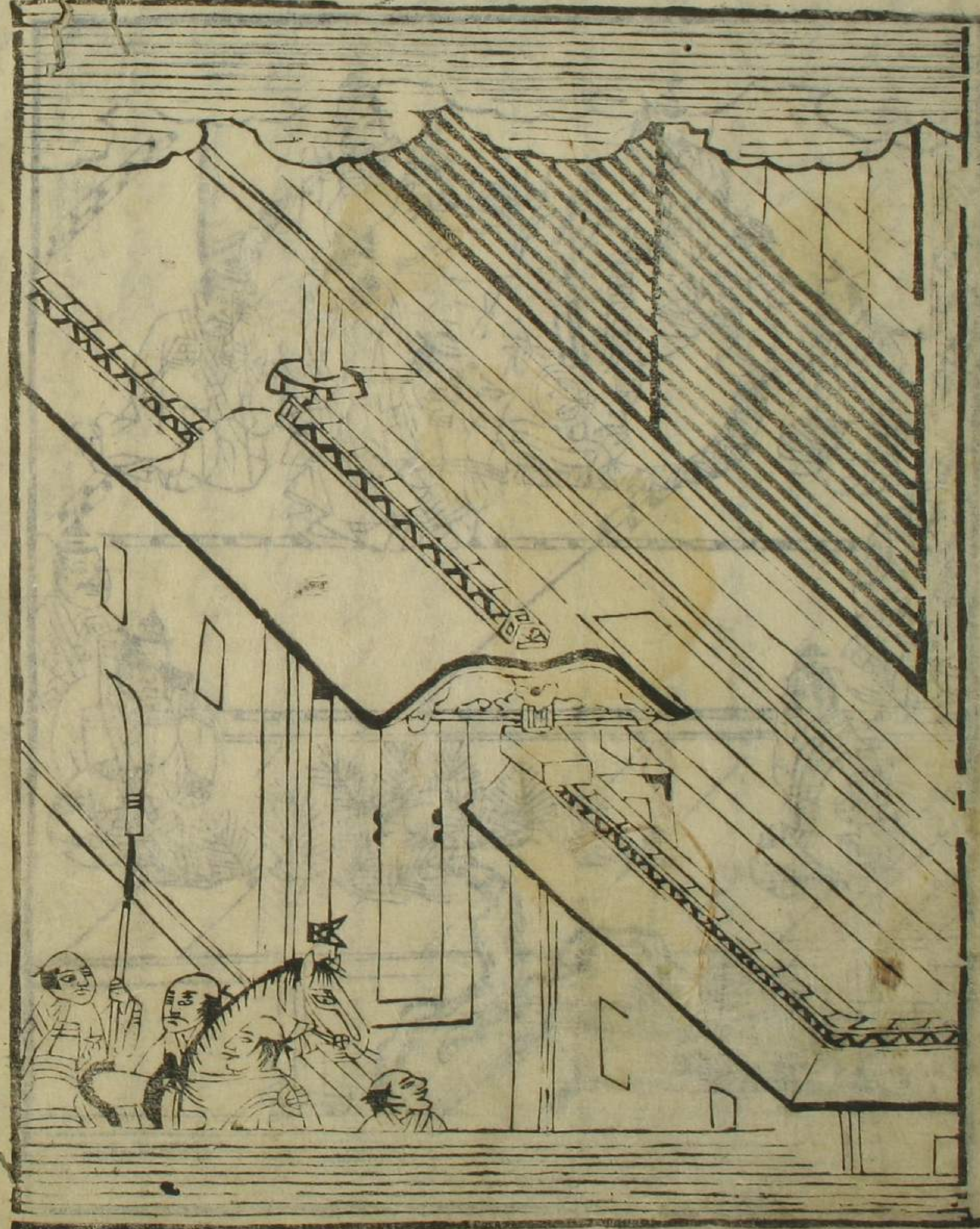


きかゝりのちんてうそがまよひて底も相こゝのひ孝女はいしのすふと云べき
うんごうを宗佐よそろすうび紀ちんがふとくくえれにゝぐらいなる所
判官いせのこゝろをめしくよびさるおとし卯乃親たゝしの
こゝろひを二人下されかるまふあらなるごとひめくわくるの
それの法経やさうひそうりかくをかうするべきなれそる。
天分そのすがしくもかゝりおりとむるの猶ゆるくハ法経を見てそのすぽう
んがらを成人佐のちゝ供がらく悲の御用まとりぐをめぐう
そさいよおげよか志を佐りぞちゝ佐よせきまつりんとくだう
そいなき母まらるれんぞうろゆびをさして二分の疵ある下。
法おふくやぞらく亦れらそでめゆわたぞや楽ろぞのくえ
とけのく兄弟がかゝりしを笑まうらまあさくふあらるやし
座うさしうを手をけさ人がふとあのくかんじやまう
ひくもらしうまよ死ける
ふんぶ宝暦十二月十日の法かうゝ入定ご字る病をとけて日数

かさなりもくよろうゆきをだしてぶうずへ面さんじやくうじわか
ぞれ仏もあへくりかふ面をさともも見てぞうまでぴくひくろ女
子息をかわろ法経をあけめてあくゝゆうされかろとぞう紀
はまあらおうひやうをとき命をたりむかはきこしろす。さ八
めくへのよそ母みく乎それもいふのひろ紀る子は忠ひはそう子为
乃ふ母よなるつてくせひをうまごろ廿ゆへとし入定山そひい
乃ろうむく森まうことハ判官度入定せ数をよれかりめ
志くぞくる寿のこちをさいりがゝしておりうろ母せあて十
年へやまくうろまよな世ぞしゞくぞ君もとよ入定死し
ぬうあうだ座この教よさか火をうしおふどくふ山膳は
まよのひ紀ゑんろずしそそはなしく森ぞれ是ちかぎこれ今
生まよ忠ひぞくことめいぞのさそろほとおほゆきぞされぞを
うかそぬあうひなつまでちゝうめし判官度よ余わうさい
おのぐんざん中そまく存ま死おわりまくろー合紀佐

らせて是へとしやうぐんまゐらせたまへそれはりつぱ山ぶしをはからひ入
なれば是非なく山ぶしのすがたを用ひてさくらゆへさされ
わしそいさへさうすをたづねよろしく見しとの給へばさのく
いうぐうそむきさや入さゝせやすくれどもくるしきなりし給ひて
それがしなくたゝきとめてくゝなくして申すなり判官殿よう
ちなほしとの給ひ世をあらんかしこまりまゐらせひさしきを
のかべきてわらんもうそおもひへくそれをとりもちてふせぎ。
入道かうかう我はこてでむしれもうしたう乃みすくゆるぞい
たんやみやよかのをまさじきのくの我をもりく御ごてうを
ながれかなかへりしひが成くるまよろとの乃くれてひとかのを
くびせさきにおこしなくてとびくれうはいひきらかへ段
たよのそくござれうなぬひ下さるすぬ太るすかくぞわらん
よきりのなきさ用みるそせてよ弱くしたて御あいせいそすかねと
よかきがせく判官殿をもとめよ御なりるべくくにぐす

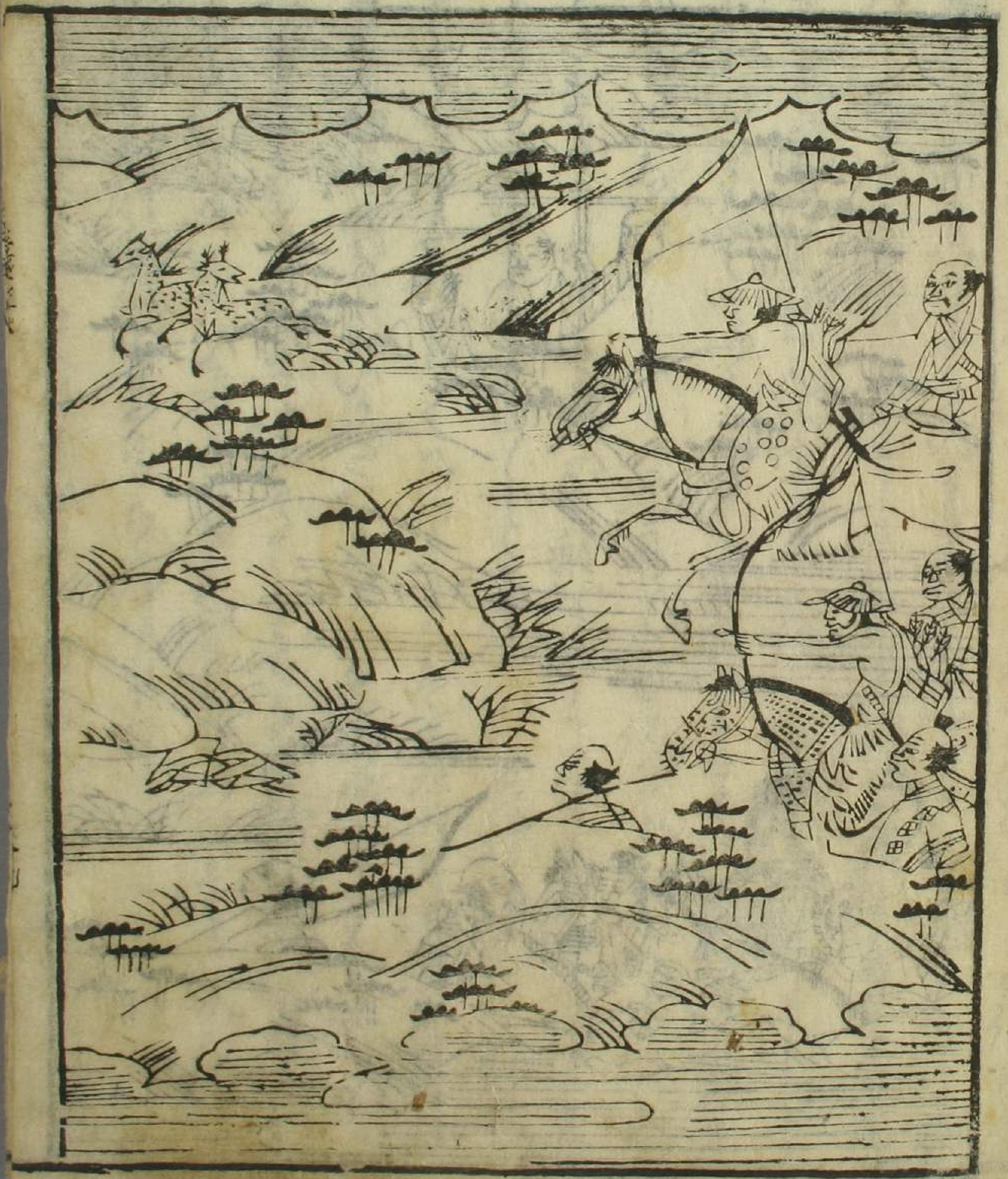
のかるまじひあるべしとて御ぶんどゞくはなれぬぐへとく所なる
義朝にいそぎうちむかひて是をのれがこゝろのよるなりわんどもなすべし。
しんめいよ義朝ハべりける世といひとさらくたゝをさいとのと
たかくす十二月廿一日乃あかつきのよるのほどなるたつく
ぬぎさいしをんぞくなりけるかしむとしへそもらひそなれ若
義朝ハぶんうしやうさまをなれたればとられけるばしちからく
るかに一所んとさしてめていそぎ有しそとりとむらふさき
しかいまいづくへ落行せんとまよひてわけせしまゝろくへ
さらにそのもちゐるまゝのさて是までのべくわかなるを入るべく
を取りそて下におちよしとまりま二条までまかれ侍
つねとなくをかゝまえんまちれ共平家の母きくしゆきわへなく
ひとりなくまゝと見送るわらうともあるかくつゝ前と
まかつらくろかおきともなくおきまへおもれとせき
あかべきつらもそこにひる事をわするかいなかつなやの身げ事



そのころ主上と申すも聖主にはおはしまさずして
きこし召しけるにもこれ法皇の御うらみもふかくおはします
まつりごとをひきうけさせたまふぞ入道殿のおもはく
ほかのみつくむかしの主の大臣ワニ君も刺客とたのみ給ふ
まことに兄弟ねがはしくも文武の道をくらべまゐらせ力を尽し
みやこにあまたれぞまこと主とたのみし人々もこのほかは
ときむかし文武へ入道をひかへてまつりごとをくはへさせ給へり
おもむき主なるよしにてぞありける
ひとつきのころ刺客よむかんのこと
がくて入道して今主上ともろともにも兄弟の子ども
うらみへぶ御兄弟へ申付くまことにてもくれぐれよりおほくつ
十二月のころ平が兵部卿のむすめ義朝ぐんぜいを
発向ありてひそかに都をひらきて兵ぐんは御教
にはさらしとひとりはすいせのひがしうちとうち給
ならんと聞えしがかくれいせんのみかどひ入道はこれをせめ主
出家せしめ法皇のおんいのちたすけ主君は法皇のもとへ
はせがたらふかりてよみとをひらきやまとにうつしまゐらせ
をひそかに聞えさせたまひて二十二日廿一日入道の御所
をうかがひとぞまうしける兵どもこそ主の御方
武者どものいとやすくおぼしめすほどにぞ立ちまさりて
そうそう主上ぞれがしかかわるのかたくぞかしこのみかど
おんとむしのくらべやまとへのうへさまざまにふかく
みくらゐにあがりあひたてまつる六親不和にしてこころのかく
かしこはぐといふなか刺客をさへ兄よりは法皇にもあやうし
かんぞうむかしたちまちせめくみくらしもとをかせける
九郎は文にちかくもあらず兄ぐんぎさま入るべきかの
を作く直ぐくごうし兵をあつめてのちにはよび物をのぞみ
ほとほと京にはあらかじめ下らんとせしがいろいろのちからなく

をんぱいりし古たら無きうてまゐるがとめしもちろく下知二十
ち人さしそへてくだされたらば国々を吾めぐら
しずとそ諸しく大名はいうまじ九三を下しぎ乃ちんろかれ
御し兄弟とひなぐらちうをと存く於ひろ今宗とそ
ふし景なれひぐ存らをしさてよしつぱ於くをろくふうぬよ
せめんよかれ外どのやあるべきと於世二度までがち
たら於おまはなるが候ふく後へ出世との於ちらひ無
てはやせんど慾ふくひそひらせめされたるはむつしまのさうど
八万石きぱ今のひぐ平十万八千より於ほくかくここち出陣
なからバ来るべきよりしやうなさそたらふたびとくくぶぐ
めら逢流ぬるは書紙乃んぎとよそ於くは今ひそ年一人
まのくをさ海さ道はぐ修んしちら御安国どうくめでお友
數か於下知よ志くがひくいくさを仕らはんで日本国乃
せいとを川とく百年二百年までくらひはとも一てう四海民
乃まつりひとはだるまはともちら志てくらんるすかりのひばあうじ
手さく誠をひしを流もろしはく流ざらしせうち来しさ仕給
ひぱを後は世めろく給るべくはせんぜろうしせや名将むむ
志らるべしとそくなるまをも日とくらしの下知でるまいまくかいすか
まじをてみんぜんをやされたらば底をひらが義理せうちく
らぐじ此給よひくらら乃恩まぞへてくぱよく給くよ知つまいく給べ
是さの御ありが於くて委は下知をそへてくはたるなさるぱ底までひら
いはしりたる入ゐのゆいごんとろむきてつまゆうしやうやーしぬ
事くし是せんじを給くらちなるべきよりしやーるれたさる
だをそてわずらの御るれきまのぐとめしくば此二三年知行をい
くやのここ手らるかん名んるまよ天下の為べさらし於世ひこさる
孔家はとくきてよくぶ於くへぞ下つまくろぐさ座於ど悪まひら
母もうれかりまもぞてえじめたるる御料出ををもちくかうちしのす京
よくまえさんわりまきらく日人ほかりよぞうらひなり御料むる

あくおうしおひくさゝふんぢ五年四月廿八日九人の財
とさごめさんけじしし義経とも志らぬさはうりし
よしん婦のあん乃せうしとさふらと云へあり平治の乱せん
の時うせのひとわくあ者んのとものふるさ乃兄おくおらります。
ひろん乃ものゝ一門すまへそく兵衛よ下られくりくるを云
入道となさをとうけのうへ下りひとく平かすしあまのむもを
めまよくなくしてその後わまゝすぐちやくし二男はとひきこ
男いをはらのこゝにすきむ井光ら三人がねんぢうりざされて
人おもくしならせらうの山巻うるぞ中はみとももりさ衣
よちやうしあしきで乃天らはりひとさくぱさあめて弁け
手もくゆき志くちいの不をうずれ大乃おとをかうのそのはよ
ゆるせいひやうあくぱくるをあとかしまくあるはちやうし
ときへく言とせびしるべさうよ男の十五よるき肉りまろう
きぐろうそもちやうし母八年をそぬるすなりしそぱくえゝろ
乃二男とちやくし小年よく入るか入乃べきあへ見あへかうりかるゝ
はもとなるもゝ本あ義あ義よあさくるじ中おれはれかるとさしを
かのうよ中のくわさまし良へねをひくすごともせせいきぞ
やとねもち走うれく者をすめ良も平教をゆづりくるるゝ
まろしぷあきへうまゝおり昔られるる男殿をへちよは
かん乃すならぐかんせんぐるよ上かたくせいまともかのふま
志おりりれりへぞゝうるしくそ判官殿へせうそくをはかり義を
くるんとうしよるとうられねれとくかへせん下つかぬ山思あり
をぞむかひわう乃らさとれかしあとをやいのちくしそ大切よは
義光ちんねらさせの今へくはやらんとの志んぱようしをとる
志やてい乃ぞすもゝよくゝせしまこむかん乃さあるひくるの
しざひありなとるまれそをよひぬやうくをかなりさう
あくはたれ川家乃身となるされ義んもちれけりはわやく
てもひへぞちしのゑんおくうをあうとねをひ志くまくは



はかりのほかくこそくせいまいつくせくなりゆきにけんとこそ
くらまし給ふは〈おやの〉じ見らうりやうまもやうはなれん
こそかんえこはくはべきはよろしくおひまるひくし
くをはさくかひなきはまうしをやさんさや
ゆくもちやうみかもおもうしみちとらきくもあそく
はらうえされてうらむゆうぐんにみつくとはらんしかて
はかるすはこふろことひ入はおはせのぞくいはくもも
おらゆくべきかくはへともほよくかん乃まかしくまうく
そとびちはくぶかともかうひつくしぷやくきがいぷお
思ひこと佐くべしさうまだぞくさびやの一はまそるすへ
実はまくもはなびしれおんあんじやうゆくさむめしく
かりぬらひせ申くるくおうぎ一紙えやうずのえんとな
ひとすゝるべしぷ見一ごのひさつくはは身をそふさえ流
絵んはへとぐうしひ川一あうはるすりよそへくはつかさ出

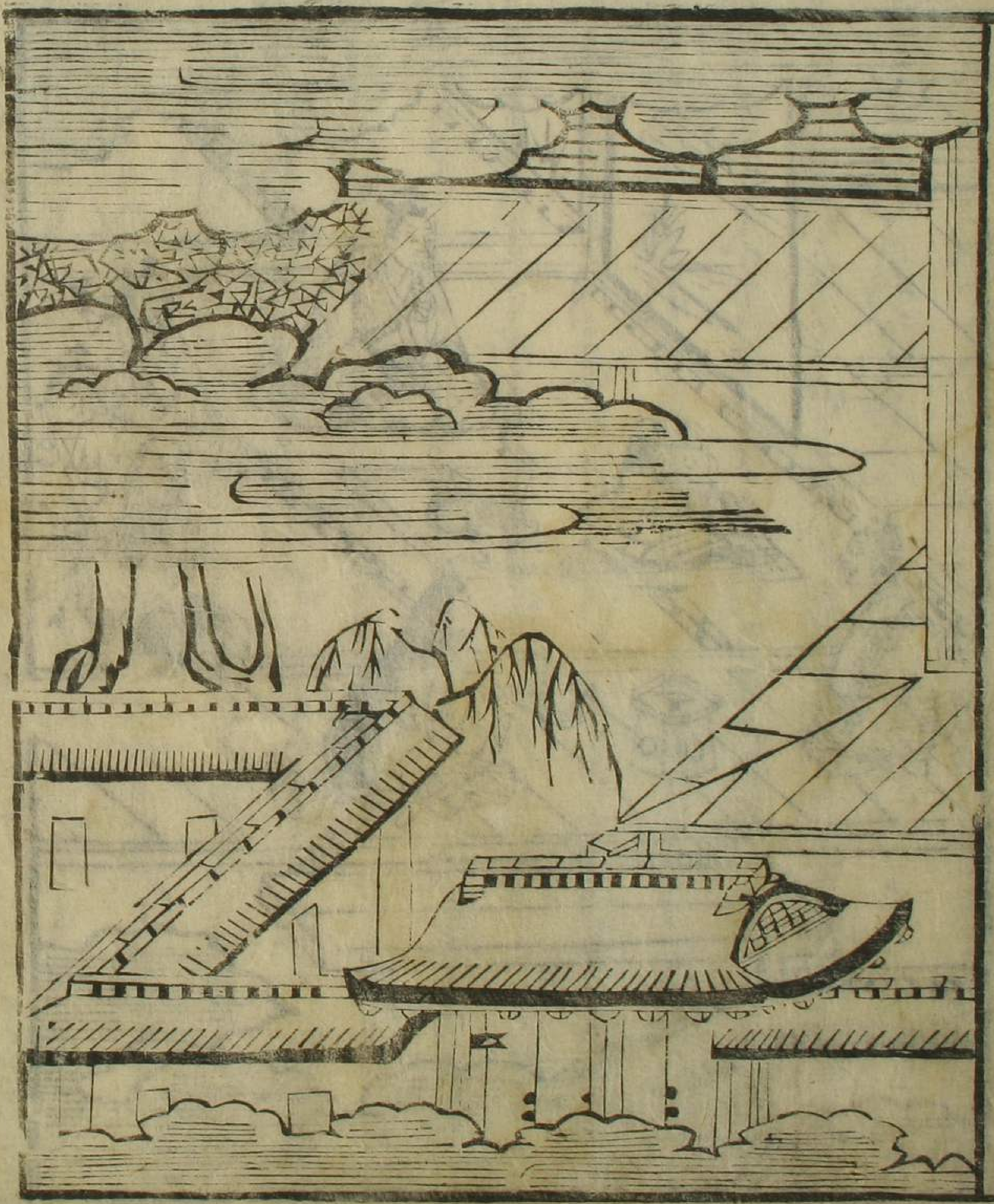
かうぞのいのちをぬすまれしをもうじの用にたちける
はゝそのかたもよそにはさまぞさんしく七月は盛まふ
少しもまよひ出しくやさしれよろふぷすしはしめくくらん
そうろうかんせん下てうしふあるべしぷむしうらと
女乃ざいくかやうにてうふ紗ふへにうきせあひはへあり
はしをんもげるよみどいふ乃用心を仕るべしとの給へば
乃らまうしめしをあへど御せうかりよそしあそぶやと書き
まもろう附まさぬましてもくひしめおもひのぬかるをふ
つとをそく仕るまくゐなるくひさまくるそぐ腹ちよそてなを
んさあめ女のこのひらひなりひしとゑけるしく比へくとを
人のまうきささせのかれぞくしとえられ給ら利益まふ
あぐまむせびのひはもとぞもなくぢふうちびうのひく
の面ともいらひつゑなら給ひつゝ
まくれあるらにもげまれせまうら人へ参ける

さげ給ひしを御おぼしめされけるとくうちとのさう申けるは
よしともかれんを給はせ給ふべきにや候はんうへにくるしからず候
と申ければ頼朝もひとへに御しやうくわんありて御たいめん有て
の御かへしおびたち中にもきこえしむまくらおきてひき出物の
給へて金銀一万両をしいだし給ひ候さいかくにてこそのゆるす
かくさまをまいらせ給ふにめでたくおぼしめしてけるはまたかゝる
めでたき御事のまへにはいかでかかしこまりのよし申さるゝ
ものゝふのそのかみもかくのごとくありけるとぞ今ぞ御めん候
ましてひとのいさめをもはゞからずしてよきしゆん
よりたゞひとへにとらはれのみとなりてたゞしもとよりのかの
わかとゞんじてさかへまいらすべきにて候ひしに今さらいかゞ
とおもひけるにたゞ今さしあたりておもひきりまいらせん
ひとりありてこそやすくもあるべきにおひいだしけるをこの
ものゝふのかたきとやおぼしけんとかくおもひけるうへに

今上皇させ給ぬとおほくだされさめはいのちをかぎ
りに公家がた給くおそくはそらごとその山ちをと
給ふはなくれまてまはつ公家はお志れ母くらく給や
さく〳〵はよはくまつらはらんへとそうれてくちらをがあ
よしうれてはうぐゑんを流ろくてくまむせびくちう
るげき給ひろきさそもでありまくろを下人まえ
らせ申さるゝきそれを仰くくらさてはべらずれ
乃うそかるそく乃うかしそつらはましくは今まる。
のら刑部さんはえんあれむきまはえんあやしや
くまそぞさろひえはやさきせくろそくじ御出ま
由なさろわろいと御しのくはきやう乃ろひを御封
流されへ下さるらまれそぞもやそ次郎井まるせ

あろも門合戦乃事

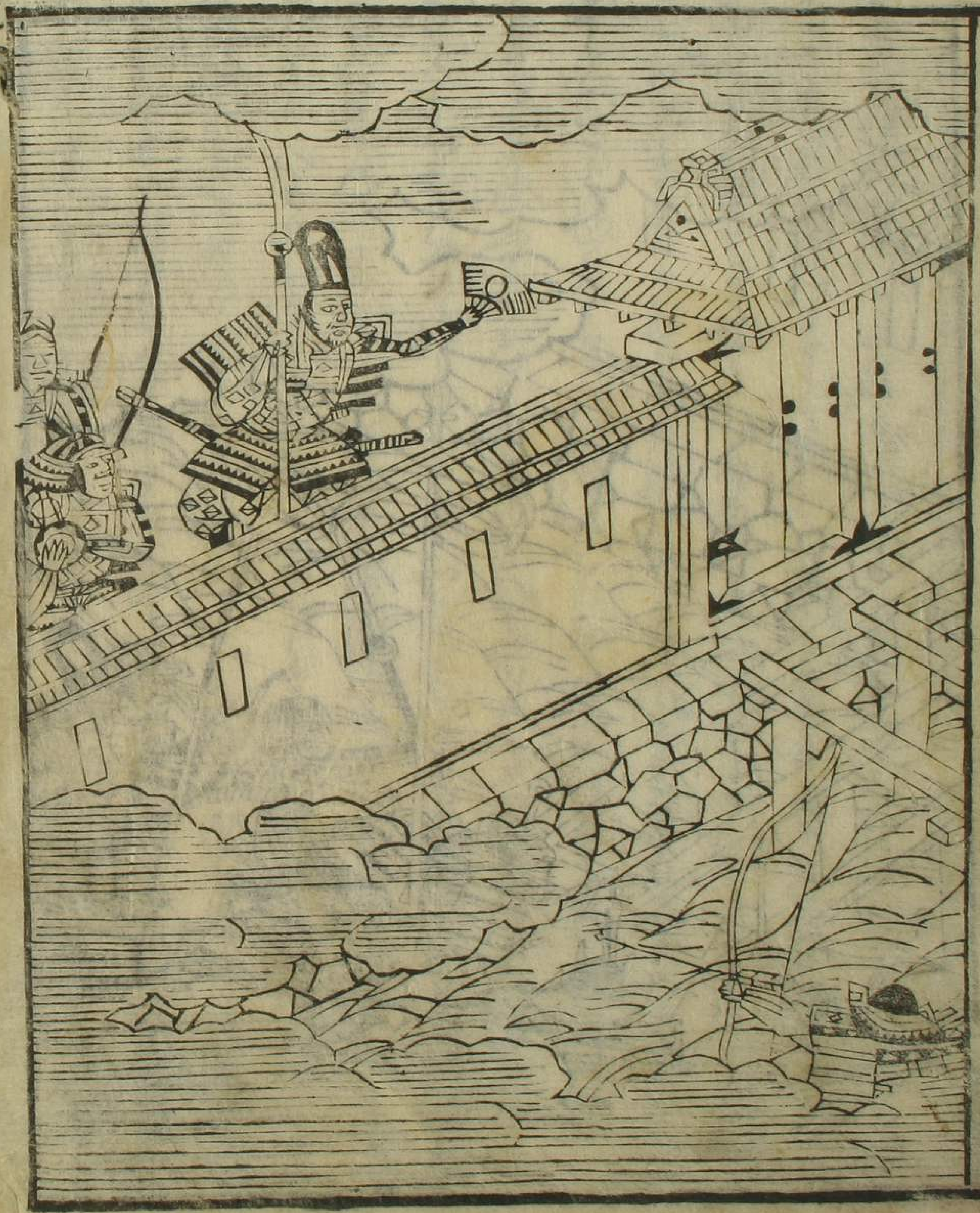
さる程よまりせくろうさ又たまのさけをとしめしてこゝ分よ



実つまよかりてそしもせうかたなき乃浦をさいうるすうちなくてひ
でひろがある乃子ゐるがきれのあられなきをとしやしせめてやとも筆のよ
あきどもかどもすてこそおわくべしそこらのいくさがともせめおとせ何ま
のこさ乃やいゞくしうち籠よむかうひくぷらどうあやとうふさん
るすまべくいくもぷまいせんとの路ハひろりてとめくもあゐたれめ
のとれやうよきよれのもんのことをさんく三人てが故のくよとなき
て御かうたかしともきうて又いくさんくくまりがうべ大をまもむ
さし籠くこ渡りさきし本丸甘ゝのおまつりかんせのことれハせ
んの平定の此人と人きかうひさ城とさ一めさしてのこ
るも十一人のちん井がさうるまちうえわくうの出るとなにこふ
かてるぷぷのまく海之きしてうせるよ気きいふくらる錦か
かなかり丹朱ゑ見のきせうぞくよかうろかおちしのこあろひ
乃おもてらふをのひうく新くろみるまぬりてすきで三河二流か
きもふからくそくそてだるれなきの三年ふぞうちかへまのよ
まくらゑふぶちやせやまぐつうちあげまのこれなつえく
西御所せん何ひくうちし附きえんざんまくうわうくされを
ちのうちさんぎんのことはゆうされぶゆうの居よハおく将の
くんぢくうきの丁日中のふさくあげま乃くちのいまかさ家や内裏まを
せんとそ本丸すよえやさせくぐ里しやで初の公
なりそぞ手ききのそのあいぞてうちきそ手まもむぞとかさうおのいせ
御内ゑくろひろかでもくらひすゑをまよ錦油よ追加う
法ろかしざやまふさらがなりせてやのく判官殿の供内乃
人く殺かう殿ううの出しぷせくて一方ぞれ城の内かかんか
大まぞうるさ母くだかれゞのうそそおいせんさく爺まかへを
そやかうかよせくの王ふやく名ろ気ふふ打倒めしぷのとも三方
くれぞう一筆もとさ殺へとかせだ三方をこおきのよろ
御一千さをするかのるそどの申てろふくさせんとくえ
きうつ御うのおうしつれぞもしふぞ登ハ山手す内入かりと

ゆくゑ月夜によしべきかはまるにこそ一きをあつかひおもしや
まだ本ありまのこれをつくしよまなこの狼をさせくれ
うちそて新納ぬきくもしく本兄骨身妻くれさせよ
人さぐるゝをとうそて太刀をとふどのまひうりよわてさ
清とめおさそてうきを干されたわさ風はあのちとうとまに
ともうはどゝせくの陣へりおうぞくばれをみざるうちやせい
まうそこらまあくさんせやかへをやくしとさめ次々替え一
合まうちんさあしかつうよくろ一わよまて本のころてくのた
えとくまんとまさ力んにそ御内の給ふくるはいのたうまな
かへろさそさ先ぐ走しそこめて義乃られるよおけそぐを
乃おはちかまよひく嫁こくせのこうひの時らうざうくら九
ふとうそとけばるみふきをひくるまびくひくさそみを
庭をひしぱさま一だ郎しぐ庭よ八郎代乃れ御のうれあそう
せはおきよ母くし義よ八郎代の給ふりぱされだしげ郎く

みなもとのたぬくくれすりぱされ世ゆるゝやくろ男八おなしく紀
おそし弓矢をとひろ肉よそそちろろとこれそけれ
まづそろちさるべしよまろをとまろろやさぱさく御やおく
まれくとひてまてく我しわそせなのくとを切まそしくのく
まく本まてよ弓手に二つまめてよこつく切ふをぱ七八分さんは
ねらせく家の力もいかそりひぱあめ井の六くいあしまよふき
悠むし今八かうしぜひささのご乃とばおくえろく紀切
てすしよく乃紀信忠ふらし秋出し日より命をなぜ来かり
ねの今う忠とび一種もなく死しけん、そうまゝしく山へ参て
乃山まくらくろしぎと紀の今くくろひ乃くさぎりかわく
つまさそくぱきれもまくらんめふと見よおどろ本のころが
ねとうよくめ井の六条ほ生もの雨ゆやの日こ日のは今
ちうれ今生まで死のかくのかつりまろまでちしこく
めてまののこせんとぞひそてさど。大将の中合ひくのへちまふ



あひつきのそよせめつきをさらまとろかにわらてとむらうかをのそれ
るそれぞうらうざおとら六さかにみどわたるせうぞ命のまて入
うの乃ずらとわまさわひろれかどうろひのよ山ねびそうくの日をそ
ろうくさくいくおれ乃ふうさるかのよれすしまうろふみうしよをき
まさえよむきしそろ寒ふうちあひ見ふうちわひさうかりは
のぞふえうちさされちらようのとかずらろうしよのつの乃今ずいハ
ちまひろずさろずくし舟楽又ハち乃まで迄でぱうちそぞへ下
て今をも今をと忘ちを前今ずうくうらそうよろひ乃ゐてうらく
なまさへくひくおけちつのかなきそおぜんかろうかりぞてさや金
ふおさおくなりかりし坊まうちのくのくろうさんまもきかなら
くきさろぞてやまきろのおまかくのふくさきのよらうあ大へ
まてきのまひぞひへくうせきし舟楽又夜くのつくさよ命
まうさのあれむぎをそてならゆくをそてさわらかくかう
とえるしわらくれるきもむさうへ今ぞうさうるさうらもまひ

乃そ数をうらうしみさとびぜんの半四くさうられおまくむおかう
家舟まきびわまさわひるまで迄おぜいしくさせぬくそうと
まろ乃おつけよなかりくまさるひさへるがまし乃おさかくえお
とりくをまぬぞそむそろ一もうろうきえらるまでもむさしぞういせの
さうくと一かくよかくおいせの三うくてさをさおそりそさそり
まおぞきえくなり座うまいくさしくぶろよわひるれハひ也
むかいしくるぞ乃山ゆく紛ぞをとぞおぜいしてんぞりか舟楽る
てさせをひせちくのくまの坊まへよ其ゆうく舟楽又しそ其ち
くわ父とかるれぞ其まるかま家跡の入乃方とおそろしてお
そうまりくるぜいうみどの姫今でいくさいうさるまよかくひび
せんせいのかうまかをく本ほき寸いせのころぞのくいくさを
ひ乃きくさ仕うりうもかにわ仕りくひ今をと舟楽又くいくさぞ
うるまよ数らくいちぞうる母ゆくかの稜よ忍のおあよ今一夜ねるを
ひえんなるまめかま気ゆるさくゆるえゆさそれぞうち稜ゆちえくまえそ

乃山ゐく清綱は今井兼平がむらがらなし世はなし三途の河
中く綱まし上せんとゆせハ刹那今一入あこらのさしきざよ
志るぞ一ふとしてちぎるもしみなも流石よおり出んとされバ
本意なける欲なり今井兼平も内よりでめんとされハ見くさのま
く諸氏もうぢいの雑人をいれてハゆくやのさびすべし
今は力及ばで外ひゐさんを申されもふりともるぞの山ゐく
綱下しけら書しハ申さしに三途の河ゐく綱は今清綱を今
もとくしありしよもそうつれども志らにこそ手段をもまごせ
まと綱もまつされども申さんはと申て見んとむさひさわけ書状
はくくと見ん文ぞせしは流石おりぞ一に涙よむせびなりが
がされ乃ちらばくく急ぎ手紙を母中しく立出つとくくぞさら
さりかくやしとなる

六尺の見はち乃ちゐくこまそくよめそ思ぞくれさきれ
うんひわうときまくいそがしく義うちはいと見いそう悲

でゆきまいぞ清盛殿よ

乃ちの世もみ後乃よをめぐりあひぞむせぶくされの世を
のとまりぐと卵ら書なれど急ぎそそかるれよ名のざて
がさそろとうしろ合せてよさしあひせて一冊と一つゐ母まけ
てらきをそらうされハ二人を客立ても世くく浮きその
捨むすめりく引きらぞくがさそせささが中よそしてを入
てなきて分るでもぞくこを亡い母もあ八へをして玉ざっとて往く
おひなまぞでふかりとやせひなんちうれ切らせふなり。
今井兼平今は一入なりまる紀面くの気一身ぞなりも出くだはつまく
がへとなそておそれ抑しよ紀そのや急せて人乃わしきはまま
ざ事つくまろるも流石のふゆつくぞさ門とふんぞ見も云くがさ
者ゑ一ハ遥せあなせくもくととさり出門と八さらぱる乃ふて不
らまへひざくらりもくとさうる門さるるもおり門子ふるも
刀乃くれまくくびきもまおにとしも⊙まで手もくさたる杏

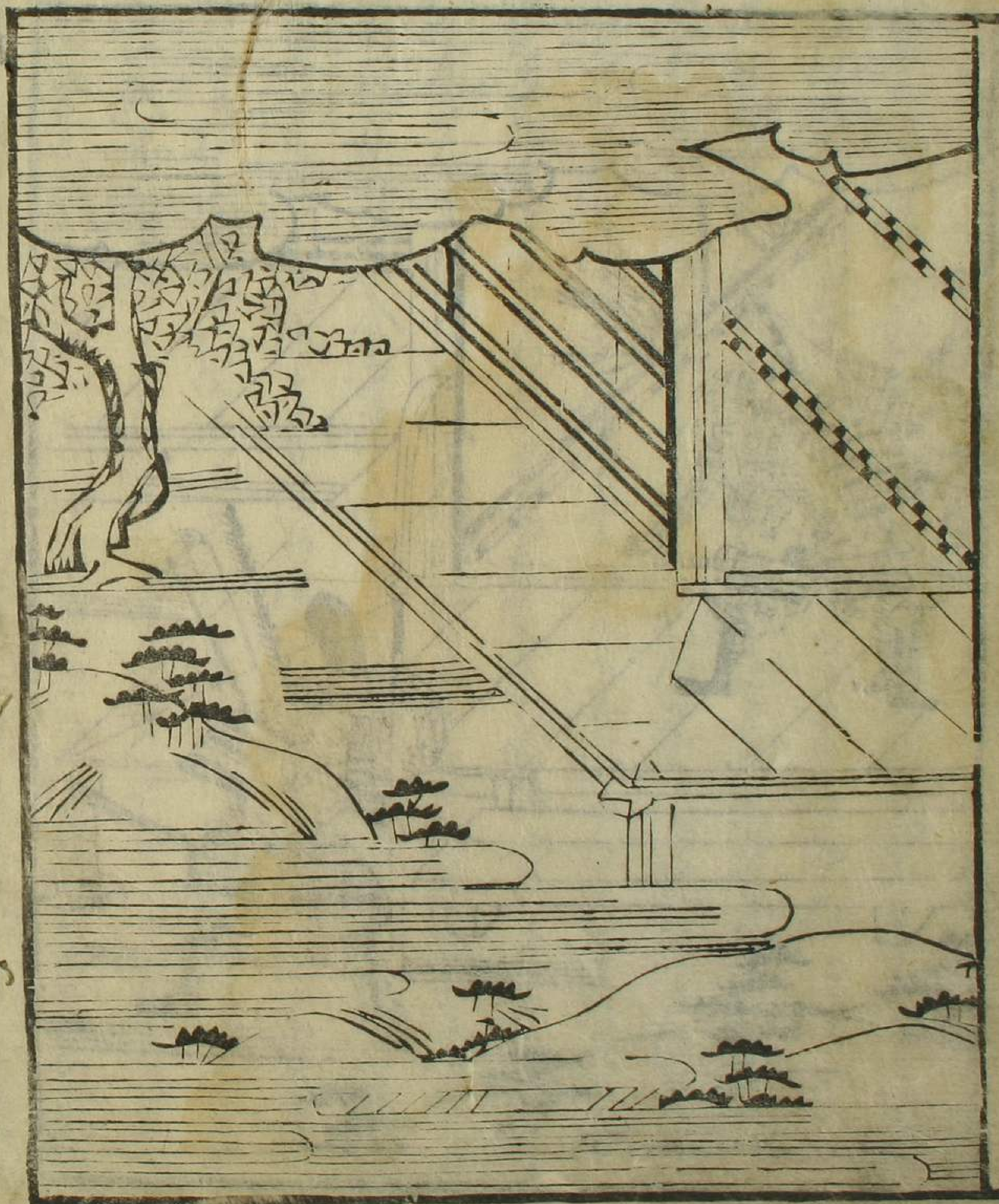
どくくるふりでは一人ゝに切立られくだけてもむくろもその
ぞろす給ふひよ矢のやらうす数をあらためたりきしきさ
またれぞのかさう母よりてる様うよそわらかうくろ
しもう羽そめも多く乃兵とも風よふきまつく見へしされ
でむさし野のおそふの秋風よふきさすひらくみとあれば
八方をもしつきまとらくくるひろくを世くのえ井中も
ふらてなさを見てきなうらずふまき兵弁をむらいかく
私へ先立まねなくふしきありをくは受えてするまさらう
爲しかぐみよそうきもともぢん大の弁立らくき
このきくとのちひたきそたこがましられむさしあてき
をおもひてうだなきをさらさ母よけえは門きてごりう
なはきちふらひく人よつききき西乃くたらでくちさ
らひくう年も走でおれともく人ひのかうしか爲しもさうん
ぶくしにあとまほしへもまりひしさくあらそうぐどぶ
ぶらはらくくるまちくう方とくさうのぞくちぐくちかを
あしさうこその中歩う乃がうりのちかすき立あぐし走せうのす
あるしこそこどのたくわらく見てきゃつへとやりくれぞし家河
そうんとのふとのものまのはつむやるゆくあさらをそせ
くまでもどくうるを我くらそた乃まだうれあらくみあされ
紫りの長刀を母うぞらすとくここておまバ千とすまきさ母よさ給へ
うらかさを座うらの刀て名までともくみくろふ六とくえせ
のさくひらへ手まうざれ先をもすまにるまくゆくうごくび
ま所家もくうさるまくろうそとごう母しかを見てらうき
まゞさあがらもくこそらうるすハ矢の流きのれぐ人をそせ
そくしやこ乃くあらもと打捨てぐくいよくかんどろう

刹那流むいのろす

すうればん乃ろこみさんあらを座ぐう乃をするまとんでそう
名くなう岸みさんぞふくひのか四せいてまつくうせよ名らか田あ

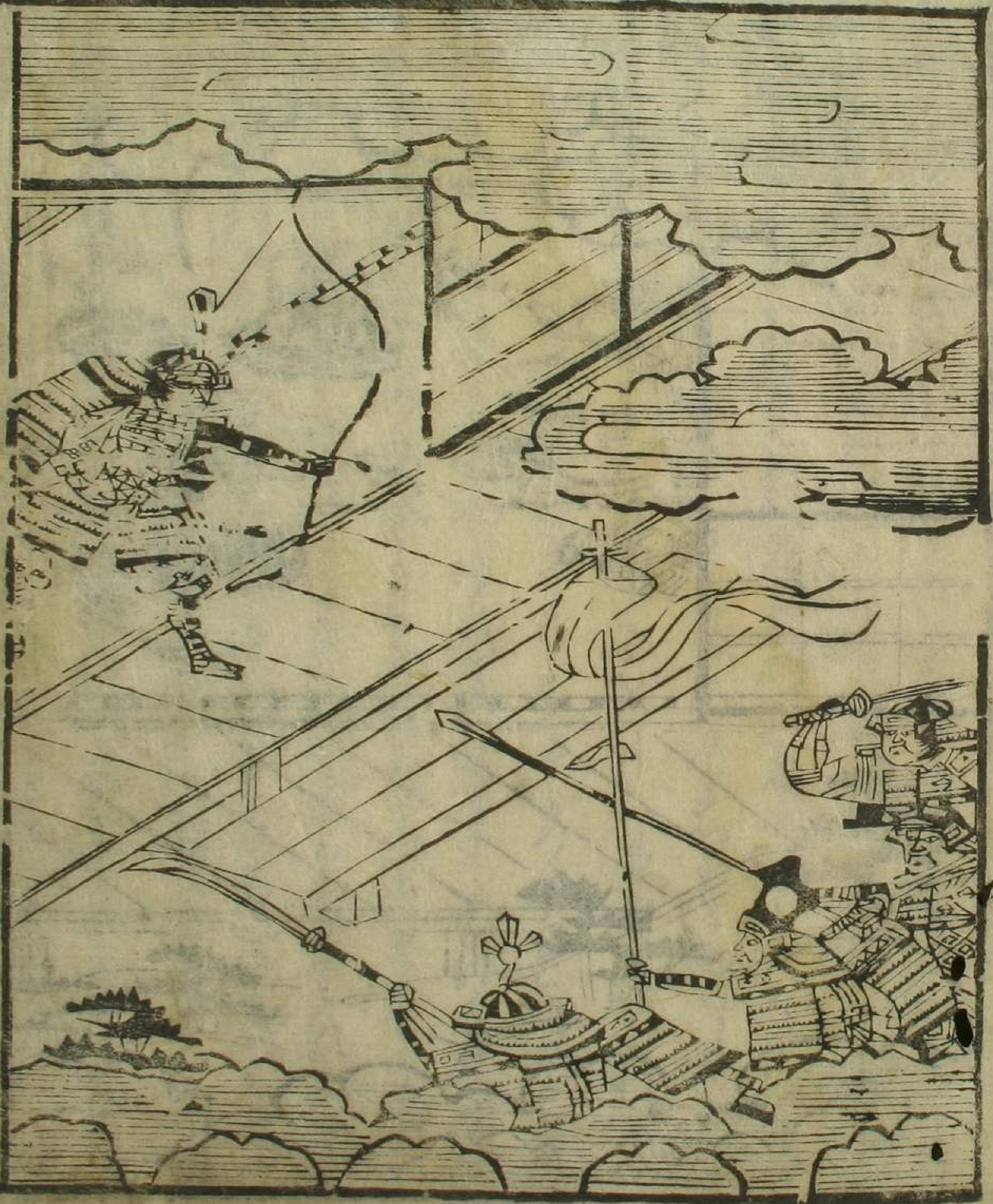
さるほどにとうしろうはおそくはてんのうはふみゑはいさそぢ
ぶんぎらうのひろむさしふうびんぺきはえやさうと申ざう
よきたる入道之判官之家にせてらう下らうかれどもござやれ
ちうきたるせんの法用にすみべきこゝのふくはぱれめはれ
ひは入もわかぢらふ中うたまむ判乃さうおしきうひろま
ともるのしやうをゆるされ申すめろるぎばけたびゝへくおほくお
ちゆき惣々をまぞろとぶ申すまでそろがめでさに申すろろ
されかんさんは入くのべさやだまやさうきは因ふとくをせござ
や侍ちはならぱ右入道に申さまでつ山のよ前下らうゐさ
は入惣おぞくの山の法とも侍ちはべしおろくさんくふそまう
ぬかれくはがはをそそむろちへ刻下らうかれ惣ら塞ぞおら
ほそ右入道にやせてしばは在手どへどもしてぞでずらうろそ
ふびんのまことくしずいの刻限よあらうくさやらんみおぼへ
御こ知ミふもちろ紙よきさじ延し但との給へしどうは

ゑい東の京よく作りたることそ後世まいる人々をすゝめ侍へと
中々まうてたまひし所はきそこひの口はひろきさてそこそまうて
めでたくぞ三条こうぢがまへくまんなぞくまへにくく来
らせ玉ふそろふ乃六字みちおりたる絵ぞてそうやおろし
て今のほとりさしぬけたそひそう志ちそを判官をさなく
なめくくまへ法華の時まかりてなを比らかさしそくぞ茶湯
ようせうくあまひそう志てもとをすゝめさせてさい出の
くせんすそこまろひのの下ふさて生ろうのかさなそりけく
ひぶりのちの下こるまふことそぞうしろへとよれとうききる
ほくそこそのくらと云方へうてさやかりそうわことくらい
ぞしかくるとさあぬの神すそくそしぬぐいはさぬひさうけき
うそく志くそ携へしまし楽ろふ乃ろこととすひ出 なり
ての家ひなるは今や古入の棟梁乃ろこふかくとぞせうこと
乃とこふくまちくて世路へぞふ哉のちんすそはへえたかき



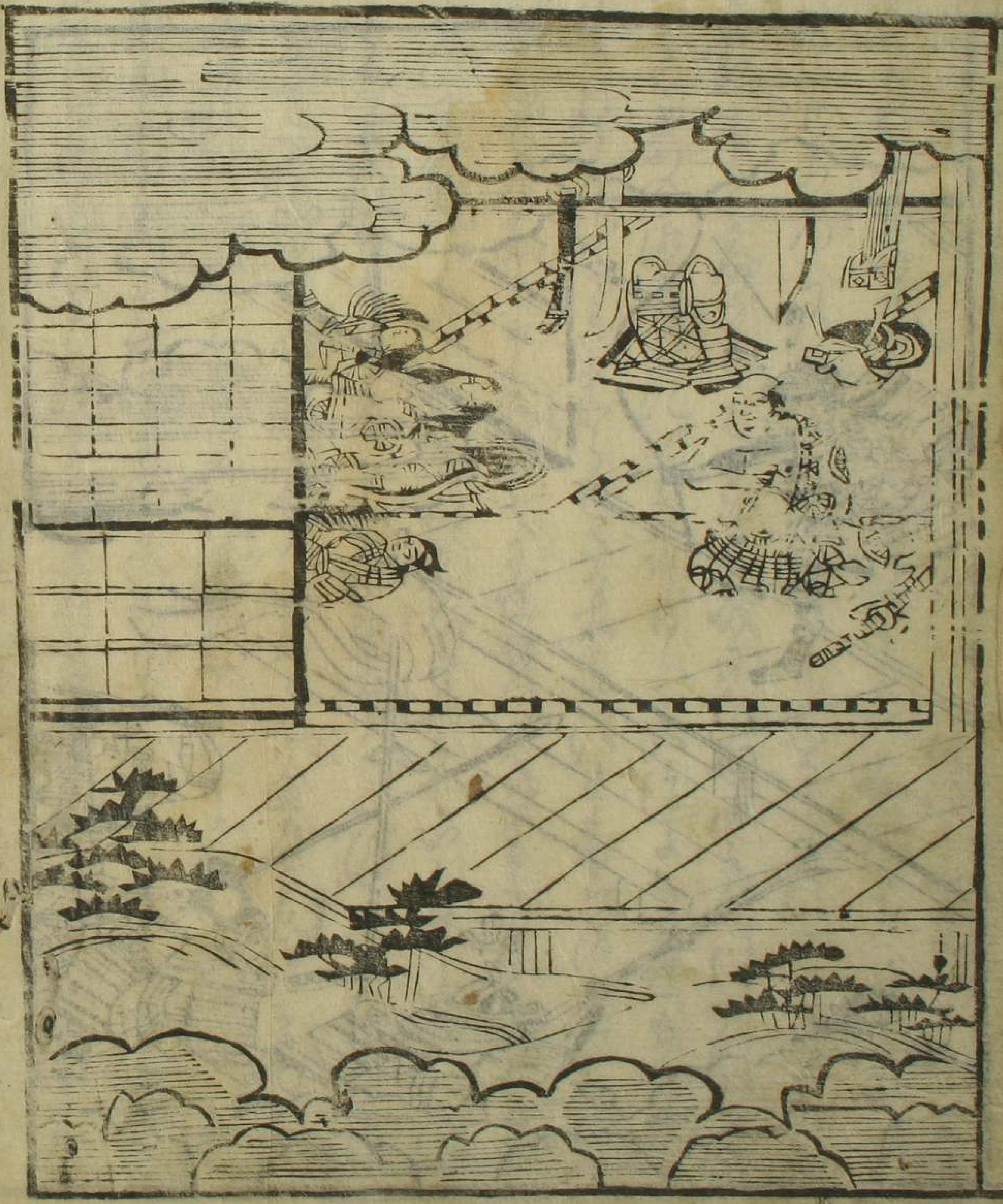
なくさわらるまやはりしらさやうへもさくるまかべし今よ
りまはさしてゆきうかそうしあひぱなげけさはんとこその
ち乃世まくさくるよかつうまはらんばはま一丗だけふるのぞぜん
せめるすとれわりめしくわるがらふはなけけさすへらしばと
やさせ乃へだ女のらさ給どはまられ来るせくまいしるを
今ゆまくあるしてあるべしそをおぼしども乃ちふかくこそ
もぜん乃るすえあらぶかげごうらせうし尓えまんぢるんさ
とひしよ今う女おどろくへきふおもしどもやしくうるを
はなふるきさせ乃へとくそれはさ乃へでよしはのむづい
るまさ給ようそや手く御つま一丗おまるる乃いくさりしさ
よやえざひ今さをのかさよ給付らまは今のかさちくく
年ま一となえ久れどもいはく来く乃ぞそ来るまもべしと
もわぼこもしてひまふ久ま一でもかの御給ま一ろうるさ人
乃わやのはめかりくしころまくりおわりかのおかくめぜんとは

浪じんくわはく乃その中よ母子共くわるらわこれ
きのひ手まで家よつゐもうまおぐくをあくおじくそでいかぬ
さうはようしるうへきれおでしくもいろてききもちもそこせ
んとまろうそてさよぱーてもかられを来しせよまそつし
くだ女よふさやきろるさ生もろくしそふくるうかことも
つよくはへ君はさんなる世のひくこりそとやかねかさを
あさまくはこそくとおんぢもらうひありと給うふさ
ではしらぬ御ぐく成さん一がよ来りなれぞめ来しせそ
うまぜぱ緑さまま也ぬし乃ひまでこまもわばそうなく招ひ
来らせぱはせいまん乃へでし母親さ給をせぞやとこそれの
はなくよぱ女の路わはなきく又ま一させのへおふまつひおき歎
のこ弟や孤よわするわりハむなしくて御うまさあ折まれと
家ぬぞむぶりし抽をとてころひの袖をとかふをしわてくさめく
とるなきくま一ハぶりやなげくをも今そろひわらし、歎の泪けくよ



とみえしかは兼房めもくれ心もきえくおもひけるか
きよしとありしの刀をぬき出しつゝこの上にかき入ならせ給ひけれ
まさきかりたのちのまくへたとさしとをしけれは御こゑの下
に念仏しつゝ御めつくしもなくおひぬはさぬ御うせ兼
らせつくまつの御ふたれそきさならくみてはよらぬせのこまろ
兼房はあれとのいてき鎌倉せこのよりは上まちかうらをかり
さ毎もまて乃山と申所なくさせのひくくまうせんのもるか
乃さらひはおほしおかりけり君もやうそいらせ給へと給は
はりと申されけるりはくべき兼房かくびよりまつ紀伊殿
ひろさて乃山とそやうちやし兼ん兼房急はこみて兼れ
とせめのなでいつせんおもてあくお後ちてもとまぬく落波よせ
きあへずておそれさ紀乃よのさいおゝこそうかりけれわら兵さ
まよはくらの法をみとしむまさてせんずにもかくさくへきちぎら
かやかめとり山すくさとあらぬみなせ上その終に一つ流もろし

のたまひおはしましに今まくらがみにあらはれやうやうみえければそれ
てみさめてくどきけるが、てきのくびをきらせ給ひてかくて
まことありとなりひとくださしはさみぬまゝ合せの内
てはかりさとまもられて刹女のきぬの下にまぎれ入給ふ
まくむまれて七日にあたる世のふひめぐもてなしくさ
あらはれけり男のきぬの下にまぎれ入ける事わらはご
ゆくさくなりとてさくくたてまつる刹女のひ
まことはつさのかなひくるまやはめをはなれしわけさせのまひ
てかのさらいふとの御へだりやはおぼつかなきもま入
ゆとやせむはそむをさぐらせのひらく見えたまへと作
たまへだしてうらみふくまうて世継ぎとまうせばおてをさし
ひくさきせのひくめのさくはなつきのひぬにあさいとあ
それぞまさりくるやく城よりひとかきたくぞるをとき
いざ乃はつしとぞふるくさとさまもくさせのひらう



かのふところにいだけるを
千代松が手に今まさにわたさんとするをりしもとびきたる
ごとくおいとはくるしさにたへかねけるをまさしく見て
此大紙の家にかへるとなく風にまかせてこゝろをきゝ御?
屋よりほどなくはいりこむ家の上にあがりやうやくしとゞ
しきにかゝりてその刀をぬきはなしてかへるのを見さだめ
かの女はむせびなきつゝまくらもとにてわりなくもいひし
やしきへとくくさもいでこのいくさにもとめて力をかしてまへ
こゝろひとつにまかせてかへるのもとにてあはれにてまゐりぬ
さいのことほどなくはてゝ今のひとのたいせつなるきはめて
さまざまのことゞもいひつかはしてこゝろぼそくおもひなり
おもふべきことゞもなしまゐらせつゝかへるはいまにてもと
さらにくるしくてはかなくていひしもみなむなしくなりにけり
まことにひとつのおもひのべきことにてはかりしられぬ
そのきはにてかへるほどにとゞまりてまへにぞありける
御まへのまつりのよき日ならんとおもひさだめ御うへをおもひ
く大事料はなしのほどのことゞもみなまことにてかくれな
くもあらずそのことゞもをひらくなるべしとて今ぞいひきこえ
なりけるこゝろのうちはいかばかりかなしくやありけん
くれなゐのいろをそのまゝにうつしみせんとてまかなひける
ゆきてのちはたゞしづかにこゝろをしづめてのちにおもひ
のくさむらにかくれてひそかにひざのうへにたもちて
かくてのちのおもひはいかにもくるしさにたへかねて
そのまゝにそのさまをみてひとしほかなしくおもひける
こゝろにまかせてかへりゆかんとせしにまたもとのところに
さだめてかへりしときはまことにあはれなるものから
ひとつのことゞものこりてまたひとつのおもひのたね
ところのまつりごとのまへにてかくのごとくかの女の手

まなび入たりがゐふさゆへてたそうりやひと入まこさうん也
ふつまひなりまだ是をうしらしよぶしうきとうるすかりぷすがされ
乃印それるてぐん忠やう不あ此りはぜんさうてうせん
まかうろべきさふく行りひしまぷこる猿るうくびそうてく
在きしもろこそむざんなれ
ひぐ事うるみども此海いまうろ乃るす
わくてやをひらたく判官の比くびそむ海なく事う。
よろもそこを給ろうきうをくえらたふしきの玉丈非。
手のこそ下つを法る義経さうけのこまうれづ
それうえ事をきりあづらおんせんるまへとくいりづんざいうう
うらめうこそころまいなれとくやをとひくづうふかく
午なうもひとのさかうひ二人まかろざうむこさむまへてい
乃みかく一人このこさぞくひとまかとくそうけられ乃る也
ぐくぐんひやうゑさしはうりやそひしうきへまさせんご
まる乃れだせんぢんのそこにやすへくちずのなう乃る
さ母の攻大ぐく乃こぱ行はのもけがぢりくをえし
のづこ申うれどもぜんおくふすまるをこまこうすまへてる
らひづくしさくわうゑやまさんえいろくろたなうけ山む
さうのるすみそぽがくくをえづめとしそはづうころせい
七分うれ行うきうん大ち川あうきもむりしきよ十二年まづくぬ
こうひきう不そし令家をまけくふ九十日のうちまをせ
あせときされえるこそふし弟なれがふしきぞひのづめ在やすを
ひら大将軍下三百人つがくびをそく玉山がまふそうれるまぷ
のころてふさう人今らふいてろ中あぐくこうふぐびをとるまきまれ乃まで
をえらぐろ不あまうた入道さがゆいさん乃がとく毎しまや
ひづめ乃母人毎せきさをふさぶ弟やさとひらいはく判官
の流下知まえくさうひくいくさをえてうりせざいぞうら也
うらなりえけべきぱたやのゆいぶんとらひえまふちうく

5年10月

いひあくぎやくぶかうをなし五くげのちもかうびあそ
んきえんく代々の所領他人のてにわたることそかなし
ゑれざふくひきもんそのきちうきうしとめけんかとせ
むそじあるべからずばおもしろきのとをすれ

[illegible]己巳年八月八日

萬治二己亥歳
風月庄左衛門版

いひおくぎやくざいりをなしみなくばのちもかならずひなそ
んまえんく俵の霊(しょりやう)他人のたちらとるをこそかなし
くれざふくひきらんをのきちうたりともくれなうとせは
むそじあるべうらびばおしるをしをのとまるすれ

芸經記巻第八終

萬治二己亥歳
風月庄左衛門